英雄達と魔法使い達

赤茶月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄達と魔法使い達

【Ｎコード】
Ｎ１９５２Ｗ

【作者名】
赤茶月

【あらすじ】
タイトル通りの英雄達と魔法使い達の共演でございます。

第一章　とある世界

第一話　当麻と美琴

「やっぱし放っておけないわよ。」

御坂美琴達は崩れゆく瓦礫を背に駆けていたが、美琴だけはその足を止めていた。

「短髪ッ！？」

前を行く数人が名残惜しそうに振り返る度に増していた感情は遂に臨界を迎え、止まっていた足は進行方向を変え、駿馬の如く駆けて行く。

白い修道服を着た少女にアダ名らしき声を掛けられた少女は速度を若干ながら弛め、先程までの進行方向に苦笑いとこめかみに血管を浮かべる。

「アンタといいアイツといい、いい加減に名前を覚えろっつーのよ！！

…ま、それはともかく！

ちょろっと様子見に行ってくるわ。ちゃんとあの馬鹿も連れて来るから！先に行ってて頂戴！」

「…そういう訳には参りませんよ…。」

その声は再び駆け出した美琴の目前からした。

「ふぇっ！？？」

えっ、ともへっ、とも聞こえる間の抜けた声をあげた美琴は目の前の壁？にぶち当たる。

二人の身長さから考えると、先刻より話題にあがる［あの馬鹿］ならば毎度お馴染みのラッキースケベと成り得たろうが、二人ともに女性で、これから交わす事を考えれば、それどころではないだろう。若干、止められた事とは別の意味でも睨み付ける視線の先には、長刀を携えた長髪の女性が佇んでいた。

「時間が無い様ですので手短に致しましょう。…貴女も上条当麻の意志は聞いた筈。彼の決意を無下にすると言うのですね？」

「…」

「皆も貴女と同じ気持ちでしょう。…だからこそ、ここを通す訳には参りません。既にこの身は満身創痍ですが、彼にこれ以上の貸しを作る訳にはいかないのです。」

一触即発

そんな言葉が相応しいかの様に空気が静けさをまし、この場に居る全員の感情が吹き出してしまいそうだ。

「アナタ、数人から女教皇［プリエステス］って呼ばれてたわよね？」

その流れを止めたのは騒ぎの張本人、御坂美琴である。

「ええ。私は天草式十字凄教に仕える神官でまとめ役でもあります。…それが何か？」

「時間が無いのは承知してるわ。だからこっちも単刀直入に行くわよ！アンタ、その役目が無かったら、おんなじ事してたんじゃない？」

「っ！！それはっ！」

「何度も言うけど時間が無いのよね。問答はこれで終わりよ！大丈夫！！ちゃんと連れ戻すから！勝負はそれからよっ！！」

言いたい事は伝えたとでもいいたいげに、自らの二つ名に恥じないような快走を見せる。

紫電を纏い、遠ざかる彼女の背中をみながら、女教皇こと神裂火織さんじゅうはっさいは一同の元へ戻る。

「申し訳ありませんが、止められませんでした…。ここは彼女と上条当麻を信頼する事に致しましょう。…では、我々は予定通り脱出致します。…異論は認めません…。速やかに行動を再開して下さい。……？」

「？…インデックスッ！！？」胸中の動揺を何とか治め、冷静に判断を下した矢先。護るべき少女の姿が見当たらない事に気付く。

（何という迂闊を！！）

彼女の性格からすればあの能力者の後を追ったとしても不思議ではない。今の彼女の記憶の中で最も信頼しているのは彼なのだから…誰よりも彼の無事を確認したい筈。

（彼女の足ならばまだそう遠くには行けないでしょう。）

まだ間に合う、と追い縋る為に身体に喝をいれ、体勢を整える。
その旨を仲間達に伝えるべく、ぐるりを見回す。
そしてその視界に赤髪の大男が映る。声を掛けようとしたその時、
白い塊が目についた。…その足元には捜索対象が居るではないか。
安堵したのも束の間、赤髪の仲間の表情を見て取り、直ぐに行動へ
と移す。

「どうしたと言うのです！？」

胸の鼓動を抑え、なるべく優しく問い質すが、少女からの返答は無
い。

お腹がすいたかも。

とでも言ってくれればと、思考が現実逃避を始めた頃、上から声が
降ってくる。
「状態は見ての通りさ。あの能力者が去って行った辺りから蹲って
震え出したままだよ。」

軽い口調からは考えられぬ程にその表情は歪んでいた。そして神裂
自身も同じ表情をしていることを自覚した。

（…最悪だ…）

以前にもインデックスは同じ症状にかかっている。
初めて見たのは3人が顔見知りになってからかけがえのない仲間に
なれた数日後。　幼きシスターに架けられた
［首輪］

最後に見たのは今回。
［遠隔制御霊装］

どちらも彼女の頭の中、１０万３０００冊の禁書目録が狙われたのだが、上条当麻によって最悪の事態は回避されたと思っていたが、甘かった。まだ終わってはいないのだ！
息も絶え絶えに喘ぐ少女を見守るしかない一同の脳裏にひとつの考えが浮かぶ。

（我々も上条当麻の元へ馳せ参じるべきでは！？）

神裂はもとより、冷静沈着を売りにしている炎の魔術師ステイル＝マグヌスでさえ、敵の元へ一歩を踏み出そうとしているではないか。

敵…。
既に正体は知れている。ロシア正教［神の右席］のリーダーにして、［神の如き者］天使長ミカエルの力を顕現せし魔術師。
いや、既に組織という器には収まりきれてはいない。数々の政府・組織・団体、果ては個人に至るまでを利用或いは煽動をし、立ち憚るもの全てを薙ぎ倒してきた男。
現在に至っては第３次世界大戦を勃発させ、［ベツレヘムの星］というこの馬鹿げた巨大浮遊要塞まで作り出した。
しかも、その目的は個人の意志による世界の救済である。

右方のフィアンマ。

時代の先導者に相応しい実力者である。

…であるが、その諸行は納得出来るものではない。効率的ではある

が、明らかに他人の意思を無視しすぎている。
ステイルが動き出したのを皮切りに、各々の武器を構え、再び戦地へと向かって行く。
行軍が五歩目を踏み出したとき、神裂の想いが叶う。
「…グッ…ま…ハァ…まっ…て欲しいか…も…。」
小さく不明瞭な声だが、効果は抜群であった。
殺気に満ちていた一同は即座に踵を返し、声の元へ向かう。
「大丈夫…なんですか？」
何処から出したのかは、決してツッコんではならないおしぼりでインデックスの顔を拭きながらも、バカな質問をしてしまったと女性はバツの悪そうな表情になってしまう。
「…あ…りがとうなんだよ、五和。大丈夫…とは言いきれないけど、…さっきよりは全然マシなんだよ！」
大丈夫な訳がない。それをわかりつつも一同はぎこちないながらも笑顔を浮かべる。
こんな状態でも五和をこれ以上落ち込ませない為に微笑む少女に、何が出来ようか？
「インデックス、やはり…？」
神裂は現状を理解しつつも、最終確認を始める。
「…うん。私の頭の中を覗かれたんだよ。…でも失敗したみたい。力尽きた…って言うのかな？今までに比べて侵食されるまではいか

なかったんだよ。」

その言葉を聞いた一同は彼女の苦痛の一端を知る。もしフィアンマが目の前に居たならば、四肢の損失を覚悟してでも殴りかかっていただろう。

「…それに…しても…」

「「???」」「……お腹がすいたかもっ（´∀｀）

「「（。□。；）」」

…一同は今度こそ本当の笑顔になる。

インデックスたんマジ天使とでも言いたげな表情を一瞬で隠した魔術師が煙草を取り出す１０分程前。

「こいつを壊せばメデタシ…ってか？」

ツンツン頭でズタボロな少年は石柱の前で呟く。

見た目は中肉中背で二枚目というよりは、憎めない顔をした何処にでも居そうな少年は、瞳だけがそれだけではないと語っていた。

ため息をつきながらも、目の前を見据える。そこには複雑に交じりあった魔方陣が刻まれてある。この魔方陣を見るためだけに人生を費やした探求者・魔術師は少なくないだろう。

勿論そんな事には何も関係無い彼は、何の逡巡もなく右手を翳す。

キュイン！

いや、気がかりはあった。何気に翳したが、この、と言って良いかは判らないが、右手は先刻の闘いで右方のフィアンマに切断されたばかりなのだ！

キュイン！

（上条さんは、実はトカゲだったんでしょうか？）

今更ながら唐変木な自問をしつつも、少し真面目に考えてみる。

キュイン！

（…俺って［肉体再生］の能力だったんかな？いや、でも修復ってレベルじゃなかったよな？土壇場になってレベル０から超能力者ですか！！もう無能力者とは言わせないぜっ！？）

……ホント～に、少しの真面目だった。

キュイン！

（つっても、生えた右手でもアイツの異能は消せたんだよな～？つーか、［幻想殺し］って呼んでたか？これってホントに能力なのか！？

いやいや、実は上条さんは地球人ではなくナメッ…）キュイン！！！

「だーっ。さっきっからキュイキュイウルセ…」

［…ｊｍｗｖヨケｂｊｖテｐｕｘｏ！！］

ドゴォ！
ズガァァン！

二種の音がほぼ同時に響き、ヤケに焦げ臭い粉塵が晴れると、厚さ１００ミリはありそうな石壁に大穴があいている。そこから上条にとって聞きたくなかった声が響く。

「てめぇ。っな…」

「何のつもりだ？」

「にぇっ！？」

（いや、こっちの台詞ですが？うーん。会話が成立してない？いいぜ！！こちとらオルソラで耐性はついてるんだ。キャッチボールが出来ないなんてそんなふざけた幻想は…）

「もう一度問おうか。何のつもりだ！ガブリエル！！」

「ぶちぇっ？？」

何度目かの間抜けな雄叫びを上げながら突然現れたフィアンマの言葉についつい辺りを見回してしまう。

そんな上条を尻目に神の右席のリーダーは言葉を続ける。

「ふざけた事を…。貴様は既に用済みだ！さっさと天界なり異相なりに消え失せろ。」

「…もしかして上条さんは要らない子ですか？…」

突如始まったフィアンマの独り舞台についていけず呆然としてしまう。

「…俺様では役不足だと言うのか！？ならばっ」

フィアンマの視線が上条を捉えるなり、先程から手にしていた錫杖を振りかぶり突進してくる。

「死なん程度には抑えてやる。」

上条当麻はあまりの展開に動けない。

（結局また闘うのかよ！つか、さっきのってコレかよ！？ヤバい！電撃と打撃の攻めだと！？）

何はともあれ右手を前に構えるが、どう足掻いても両方はかわせない。先程の攻撃を見るに防御しても骨の２・３本では済みそうにない。

対して必勝のタイミングにフィアンマは知らずの内に笑いを浮かべてしまう。

（電撃は既に［幻想殺し］へ届いている。後は錫杖の一撃によって骨の２・３０本でも砕いてやればよかろう。死ぬほど痛いだろうが死ぬよりマシだろ？）

もはや…と、上条ですら避けるのを諦めた刹那、視界の隅に見慣れた色を見つける。

鮮やかなその色に浸る暇もなく、発光体は大きさを増して行く。

（これって！！？マズイ、右手が間に合わねぇ！）

過去に一度だけその身に迫った経験のある上条は青ざめ、初見だが、自分が手にしている武器に勝るとも劣らない威力を看破したフィアンマは、後一歩の踏み出しを諦めた。

二人の間を綺麗に割って入ったのは［超電磁砲］。学園都市第３位の異名となっている必殺のレールガンである。

ならば其処にいるのは…。

「お邪魔だったかしら？」

御坂美琴。参戦である。

「熱っちぃ！！左腕かすったぁ！！おま…ちゃんと外せよっ！上条さんは此処に来てから何回命の心配すれば良いんですかっ！」

「…何よ！？絶妙のタイミングだったでしょ！！」

喚きたてる上条に剥れた顔の御坂。どちらの顔にも嬉しそうな気色があるのはご愛敬。

「うん。良い技ね。」そんな二人の耳にクリスタルボールの様な美しい声が届いた。

第2話
4者4様

「嘘っ！？何よ！今のはっ！？」

「何だ？誰かまだ居るのか？」

電磁波によるソナーを展開していた御坂には、この場にいる三人以外は探知出来ず、ＡＩＭの反応も確認出来なかった為に、驚愕を隠せないでいた。

「…今来たばかりのガキはともかく、お前は俺様より先に此処に居ただろーが？」

すぐ隣でする放電音はさておき。上条当麻は珍しく思案に暮れる。

（なんだろうな。この違和感は。）

［無理はナイワ。さっキからハナシかけてモ、打ち消サレテたカラ］

「ひゃっ！？また！」

既に怪奇現象の類いと思い込んでいる御坂美琴は、思わず上条の腕にしがみついてしまう。

「う～～ん？」

思わぬ急接近に顔を赤らめながらも、上条は思案を続ける。

「そうか！幻想殺しか！？」

［ｊｍｘｔｒワａｊ０タシｊｍｆｐｕｗゲンソウアツｔａｌｏｔｇカイｔｊ０ｍ？］

「既に似たようなものだろうが。今は俺様のテレズマが力を与えているのか？」

［ええ。それと其処にいる女の子のお蔭ね。最も波長の違いで大分不安定だけど。］

大胆な行動をしてしまった自分に焦り捲っていたが、想い人の顔が赤く染まっていくのを見て、更に強くしがみつきふにゃふにゃ状態の美琴であったが、自分が話題に出た事で正気を取り戻す。

「えっ！？アタシ？」

［エぇ。貴女の能力ヨ。ワタシの天使としての力は大分ヨワマッてしまったから、干渉するには４大精霊の中でもミズが一番なのだけど、イカズチも波長がイイのよ。］

「フン。［神の力］ともあろうものが。無様なものだ！」

「…天使！？水の精霊？［神の力］って？…もしかして…それって？」

学園都市第3位の頭脳は、これ等の単語から一つの答えを導きだした。

「それって…大天使？…嘘でしょ…」

あまりの事実に気が遠退くのを感じる。
美琴自身はクリスチャンではないが、お嬢様学校である常磐台は、ミッションも道徳の一環として取り入れているし、［神は我が力］の意をもつ聖告天使は知名度も高いのである。

大体からして御坂美琴は今回の事件に関しては全くの無関係なのだ。妹達の1人が生死の境をさまよったが、彼女の預かり知らぬことであったし、幼き容姿の妹と新しい妹をも救ったダークヒーローは、今回の件を彼女に伝える事はないだろう。

あくまでも
当麻くん！大好きっ！！
なテンションでこんな所まで来てしまった彼女は遂に（ようやく？）大きすぎる事件の一角に触れようとしてるところであり、まさか天使という超存在に出会えるなどとは夢にも思わなかっただろう。

そんな彼女を覚醒させたのは、上条当麻の力強い腕の筋肉と、豆電球が点ったかのような笑顔である。

「わかったぜぇ！！」

どこぞの探偵よろしく、左腕を上げ人差し指を犯人？？に向ける。

「フィアンマっ！お前からは殺気が感じられ無いんだ！！」

「「は（ぁ）ッ！？？」」

……御坂美琴は、自分の目が点になるという初体験をしながらも、名指しされた男の方へ視線を向ける。
どうやら彼も自分と同じ経験だったようで、こちらの視線に気付くやいなや、下を向き何やら呟きだした。
どうやら自分を負かした男の脳内が残念な事が判ったようで、酷く落ち込んでいるみたいだ。

（あら、武器を握り絞めているわね。…うん。…今度は私、邪魔しないから）

ご自由に～。と美琴でさえ匙を投げた時、またもや空気全体から美しい声が響いた。

［彼の攻撃が貴方を仕止めるモノでは無いと気付いたのかしら？］

流石は慈悲の属性をもつ大天使。上条当麻の空気の読め無さも寛容の内である。

「そう！？そうなんですよっ！！わざわざ壁を壊さないでもオレが通った道から奇襲かけても良かった訳だし、さっきも手心加えてやるみたいなこと言ってたしさ。何つーか、やんわりしてるんだよな。」

あまりの静けさに流石の鈍感にも、何やらやらかしちまった事だけは理解できた様で、冷や汗をかいた時に入った天使のフォローに感動しつつ、自分の考えを披露していく。

「フン。俺様が不意打ちなんて不様な真似をするか。」

どうやらただのバカではないと、多少の安心をし、いつものペースを取り戻すが、後半の発言に少々不機嫌さを垣間見せる。

最も上条の頭が残念なのは事実なのだが…。

「…ねぇ。なら何でアンタ達は戦ってたのよ？あの一撃はとても峰打ちなんてカワイイもんじゃ無かったわよ！」

美琴もようやく思考回路が働いて来たようで、この神殿の様な場所に辿り着いた時の記憶を思い出す。

「当然だろう？コイツはヴァジュラ。嵐の邪龍すら滅した神具だぞ？いくら手加減をしようとも、人間如きが受け止められるか！わざわざ遠隔制御霊装を潰してまで手に入れた代物だ。」

「っ！？てめえっ！！またインデックスを利用しやがったのかよ！？」

「そうだ。最後の土産にな…。貴様に敗れ、残った僅かな力でコイツの作製方法をな。無茶をしたせいであの霊装は使用不可能になったがな。」

「ふざけるな！そんなモンの為にまたインデックスを苦しめたって言うのかよ。」

「…苦痛はあっただろうな。だが、死ぬまではいかないだろう。」

「…てめえは…。まだそうなのかよ！自分の目的の為なら他人の意思はどうだっって良いって言い張るのかよ？お前が今オレに殺気を放ってないように、利用したり蹂躙する事以外だって出来るじゃね

えか！？なら何でそれ以上の優しさが出せねえんだよ！！
いいぜぇ！
ヴァジュラだか何だか知らねえが、ソイツが人の痛みより大層なもんだってんならっ、
そのふざけた幻想をぶち殺すっ！！」

「…そんな場合ではないが、構わん。これ以上、東洋のサルを調子づかせてたまるかっ！」

オォォォッ！と、二人ともに突っ込み、数えて三度目の闘いを始めてしまう。

「ちょっ！？てーか、天使はどうなったのよ！？居るんでしょ？此所に！？」

今更美琴の声が届く筈もなく、ややフィアンマが押し気味のファイトはエスカレートの一途を辿る。

［わタシヲ気にかけてクレル人がいるだケデ充分よ？アリがとウ。］

「えっ！？…はぁ。ドウモ。いや、それが普通って言うか…その…。」

大天使からの感謝の声に思わず照れる御坂であったが、全世界の神職者が聞いたら鼻血を出しながら五体投地を繰り返す程のモノであることには気付いていない。

［ソレヨリモお願いがあるの］

「私に…？？」

［ｋｗｍエえｇｍｗｌ］
天使の中でも最高位の一柱にお願い事があると言われたのだ。いくら信心が無い者でも緊張の色は隠せない。
［大丈夫よ。貴女はいつものチカラを使うだけ。少しだけ精神を集中して貰いたいけど、先程の技や、探知結界を見る限り不安要素は皆無といった感じね。見えていない筈の私をずっと見ているのも、ポイント高いわ♪］
「…やっぱり、そこだったんだぁ。」
そう彼女は自分の能力で探知出来なかった時からほぼ直感のみでガブリエルを特定し続けていたのだ。
フィアンマ程の魔術師ですら居場所の特定が出来ていなかったのを考えると、ガブリエルが御坂美琴に高い評価を与えているのも頷ける。
案外、この大天使と電撃姫のシンパシティックは高いのかも知れない。
……と言うか、フランク過ぎないか？
「‥テヘヘ。…ハッ！？
いや、それはそうと何をすれば良いのかしら？」
［フフッ。そうね。それじゃ本題に入りましょう？
簡単に言うと、少しの間だけチカラを行使できる依り代が欲しいのよ。それでね？貴女にソレを造って貰いたいなぁー、って。］
「ハイィッ！！？」

［で、レシピはね……］

…レシッ？……。…まぁいいか…。

「クッ！このぉっ！！…せりゃ！…うぉぉおっ！？」

避ける。いなす。見切る。打ち消す。…のはいいが、先程からこれ等の行動をランダムに続けているだけの状況であった。

（クソッ！全ての攻撃が鋭くて、前に出れねぇ。コイツ魔術以外もこんなに強ぇのかよっ。こんなんだったら魔術の攻撃の方が…）

上条当麻はフィアンマとの2度目の闘いを思い出す。

「いや！有り得ねぇからっ！！」

悪夢を振り払うかの如く、奮起一発左手でのカウンターを繰り出すが、ヴァジュラのベースになっている杖自体が強固なモノらしく、簡単に防がれてしまった。

（マズイ！）

防がれた左手は無論の事、武器破壊の意図を込めてフェイントに使った右手も直ぐには戻せない。今のところ魔術らしきものはヴァジュラによる雷だけだが、このタイミングで他の魔術を使われればまず回避は出来ない。上条当麻に出来る事は、どんな攻撃を喰らおうと意識を手離さないように耐え抜くだけだった。

…覚悟を決めて歯を食い縛り攻撃を待っていたが、いつまで経って

も何も起こらない。不審に思い相手を見ると、自分の左斜め後方を睨み付けており、いつの間にか投擲の体勢を取っていた。

「貴様がそんなものと言ったコイツの利用価値！いま見せてやろう！！」

元より黄金の光を放っていたヴァジュラがより一層の輝きを見せる。

「！！アレはダメ！貴女はワタシの傍から今すぐ逃げなさい！今の私では防げないわっ！捲き込まれない保証は無いのよ！」

「後もうちょいなのよ！？此所だってそんなにモたないでしょ！」

美琴の言う通りガブリエルの依り代は半透明ではあるが全身が分かるほどまで出来上がっていた。

そして、崩壊の音と振動が間近に迫っているのも確かだ。

退くも地獄。留まるも地獄。美琴の目が不安を隠せず、あの時のままに当麻を見てしまう。

…そう、あの時のままに。

「！！おう、任せろっ！」

「やっ！？何してんのよ、バカーーッ！！！」

上条当麻は駆け出す。フィアンマにではなく、ヴァジュラが通るであろう死の射線上へ！

「おらぁぁあっ！！」

「ッ！？…チッ、馬鹿がっ！」

神殿に着いてからの言動で上条当麻を殺そうとする意図が無いのは明確だが、運命は無情だった。既に無慈悲なる一撃は放たれていた！

（そういや、雷は消せるかも知れねぇけどあの杖の事、すっかり忘れてたな。まぁ、オレの身体に当たればコースくらいは外せるし、御坂達は助かるだろ…。）

上条からは目を開けていられない程の光と、杖が高速回転している音しか確認出来ない。あと一秒とかからずに死神の鎌は彼の命を刈り取るだろう…。

（…走馬灯とかは見れねぇけど、なんか長く感じるなぁ。今までの思い出か。そういやビリビリの奴、まーたあんな目ぇしやがって。ま、今回は泣いてねぇだけ成長したってこったな。…ハハ、ここにきてから何か物分かりが良くなってきちまったな。上条さんらしくないけど、女を守って死ねるんなら満足ってやつかもな！）

見えるのは走馬灯の様に過去の記憶が駆け巡るのだが…、ともかく、走馬灯が見えていない通り上条当麻は死ぬ処か傷一つついていない。

「それにはまだ早いようね？」

「…天使さん。か？まだ生きてるのか、オレ？」

右手を翳したまま呆けていたところ、真横からかかる声の方へ向くと顕現したガブリエルがいた。一方通行達と戦った時と姿形は同じ様である。

「ふぅ。無茶って言葉じゃ追いつかないわよ…。ええ、正真正銘生きてるわよ？最も、後ろに迫る危機を乗り越えられたら。だけどね？」

「へ？後ろっつーと？」

バチッ！バリバリバリッ！！！ゴロゴロゴロ！！ピシャアァッ！！！！！

「み、御坂さん…。」

鬼の形相の御坂美琴がいた。その怒りは凄まじく、彼女の周囲に放電膜が見えるほどだ。ガブリエルでさえ［ドゥルガー］？と、その姿に戦いの神を認め、冷や汗を流していた。

「ア・ン・タ・はーっ！…何でよ！何でそうなのよっ？確かに私はアンタに助けを求めたわ。だからって何でアンタが傷つかなきゃいけないのよ！？いつもそうよっ！いつもいつもいつもいつも～。…し、死んじゃったらどうするのよぉ。さっきのだってミーシャがいなきゃ…ふっ、グス…アンタが生きてくれてなきゃ…ウゥ…どうしたらイイのよぉ…ヴァカぁぁ…。」

「上条当麻。アナタ。最低！」

「！！いや、な、泣くなって。上条さんはこの通り元気で…ってそういう事じゃねぇのか？わかんねぇ！何で怒ってから泣き出してんだ？

何か知らんが不幸だーっ！！」

第3話
誘い

「メッ！」ドスッ！！！

「ぐぁお！？」

上条当麻がお決まりの台詞を叫んだ途端、大天使が子供の躾をするように、彼の額を指で突く。
イヤ、突くというより、穿つ！
短時間用の仮初めの身体とはいえ、熾天使が顕現しているのである。
後に［あらゆる痛みの中でも一番きつかった。］と、上条当麻が震えながらも語ってくれる様に、慈愛と仕置きの交じった［かあちゃんアタック］は、有無を言わさぬ躾（トラウマ？）となるのだ！その一撃は海軍本部中将の言葉通り［愛ある拳は、防ぎよう無し］である。彼もまた英雄。

「痛ぁあっっ！！て、天使さん…。イキナリ何をなされ…」

「他人の為に流した涙を何だと思ってるの！？貴方を想う彼女の何がわからないの！？これだけの心配をしてくれる人が居ると言うのに、言うに事欠いて不幸とは何ですか！！」

怒られ慣れてる上条当麻でさえ直立不動。軽口で反論したくても身動ぎをしようとすら考えられない。

それもその筈、産まれるまえより子供達を見守る慈愛の天使が本気で説教しているのである。
それは正論であり、訓戒であり、言霊を持った教えである。

「貴方が他人の為に戦えるように、貴方を護る為に戦える人も居ます。その人の為に立ち上がるだけではいけません。貴方が救った人をちゃんと見ていますか？一緒にいる事で満足していませんか？向き合うと言うことに終わりは無いのですよ。」

「…すごい……。」

普段から説教＋ぶん殴りの俗（略？）称［そげぶ］を武器に奮闘している上条当麻が俯きながらただ黙って説教されているのだ。その姿は歳相応よりも若干、幼くみえる。ガブリエルの手腕に感心しながらも美琴は当麻の事を可愛く思ってしまう。
最初こそ不貞腐れていたものだが、耳を傾けている内に分かってきた。
オレの為に怒ってくれている。正しい道を見せてくれている。と。
説教されている本人は気付かないが彼に諭された者達もおそらくは同じ気持ちであっただろう。

（…すげぇ心に染み渡るけどまだ終らないのでしょうか？）

これも同様であった！（ハズ）

「あ、あの～。ミーシャ？もうその辺でいいんじゃないかしら。」

「そう？美琴がそういうなら良いわ。でも、最後にもう一言だけ言わせてもらうわね？」

「「……御手柔らかにお願いします。」」

「上条当麻。鈍感なところは貴方の美徳とも言えますが、無関心とならないように。耐えられなくなったら廻りを御覧なさい。」

「はいっ！」

「グフッ！…何をほのぼのやってる。貴様ら！」

「あら、復活？」

「フィアンマ！？そうだった。アイツの攻撃って結局どうなったんだ？狙いは天使さんみたいだったけど、何が目的だったんだ？」

「あぁ。アンタからは見えなかったでしょうけど、具現化が済んだミーシャがなんとかしてくれたのよ？あの魔術師？の目的なんて知らないけど、あぁも派手に吹っ飛ばされちゃ、無傷って訳にはいかないでしょ。」

「そっか。つーか、御坂は何だって此所に…」

「う！？ゴメン。…でも、」

「イヤ、良いんだ！オレの為なんて自惚れだろうけど、助けに来てくれたんだろ？ありがとなっ！」

ボンッ！！！「う、ウンッ！」

（何コレ？この笑顔破壊力有りすぎでしょ！何で褒められただけでこんなに舞い上がりそうなのよー！）

再び泣き出してしまいそうで、真っ赤になった顔ごと横を向いてしまう。

「？何だ、照れてんのかよ。ホントに感謝してるんだぜ？…そんじゃとっとと終わらして一緒に帰ろーぜ。」

「うん。…そうねっ！」

再度の感謝と［一緒に］の件りで爆発しそうであったが、ポンッと叩かれた肩の感触が安心させてくれた。

（コイツとこんな雰囲気になれるなんてね…。色んな人に迷惑かけたけど、追いかけて来てホントに良かった。）

肩を並べてこちらへと向かう二人を感慨深く見つめながら、フィアンマに声をかける。

「貴方も良いわね？」

「…まさか、あのチカラを瞬時にワープさせるとはな…。既に抗う術も力も無い。幻想殺しの…上条当麻の選択を見届けよう。」

「了解。簡単にって訳では無かったのよ？繋げられなかったエネルギーは仕方なく貴方にお返ししたけど。」

「それでこの程度のダメージか？フン。俺様の身すら慈愛の対象とでも言うか。」

「…揃ったわね？イキナリだけど、上条当麻。貴方、世界が歪んでるって言われたら信じる？」

「…それってソイツも言ってたけど、内容まではさっぱり。」
「今はそれで良いの。…そうね。ワタシで例えましょうか。ワタシはこの大戦以前にも貴方にあったことがあるのよ？…Ａｎｇｅｌｆａｌｌ…。…貴方のお父様…。」
「！？っあん時の？いや、でも、口調が全然？」
「信じられないかしら？ガム美味しかったのに。」
「あぁ、そういやそんな事も！？」
「信じて貰えたようね？あの時に気づいたのが最初だったかしら？」
「…つ～と？」
「あの時サーシャに乗り移ったワタシは［神の如き者］と［神の力］が入り交じった状態だったのよ。名前も天使長よりの［ミーシャ］だったし。」
「そうなの？じゃあ、あんまミーシャって呼ばない方がいいんじゃ…。」
「良いのよ、美琴。折角仲良くなれたのだもの。堅苦しいのよりは、こっちの方が嬉しいもの。」
「ん。そっか。」
「…お前はおかしいと思わなかったのか。火と水が同居し合い、天使が自らの名を名乗った事を？」

「？？？」

「無理よ。世界中でも違和感に気付けたのは十指に届くかどうかでしょ？それに、この二人は魔術とはかけはなれているわ。」

「……そうか…。ならばそういうモノとして聞け！そこの天使はそんな状態でも本来の力を顕現したのだ。そしてアックア共との戦闘の際にもそれは使われた。両方とも［神の如き者］が交じった状態でな。
俺様が４元素の歪みを正したにも拘わらずだ！」

「…元の位階に戻るため、ワタシは力を行使したわ。ただワタシ本来のチカラのみではなく、［ミカエル］とも違う、何かをかんじたわ。」

「今回関連する件では、ワタシは三度の変化をしているの。二回は先程の話の通り。そして三度目になるのが今よ。今が一番本来のワタシの思考に近いわね？コレも美琴のお蔭よ。」

「つまりだ。顕現した依り代は４元素の影響に異様な程の反応を見せる。
本来ならば熾天使級を操るなど不可能に近い。勿論、俺様を除いてだがな！だが、今回はガブリエルの位階への帰還という条件があった為に容易い事だった。これだけでも異常なのだが、本来の属性以外で安定している事が何よりの意外なのだ！！」

「……つまり……？」

「本当なら召喚された時点で今のミーシャじゃなきゃおかしい。って事？」

「よく出来ました！その通りよ？…最も、欲したのは［神の力］だから、このままって訳では無かったでしょうけど。ワタシ達は現世ではとてもアンバランスなの。少しでも天秤が傾けば悪魔にもなってしまうのよ。」

「それをビリビリの能力で安定させたって事か？スゲーじゃねぇか、御坂！」

「え？エへへ。…でも…。」

「そうだ。先も言ったが、ソレ自体が異常なのだ！」

「そう。そしてそれらを含んだ歪みを無くそうとしたのが、彼の目的よ。

そして、その目論見は叶わなかった。少数の抗いにより。」

「…俺様は届かなかったっ！！そして、次はお前だ！」

「…オレ！？」

「上条当麻。フィアンマがやろうとした事は、何れ世界が望む事。」

「それを阻止した貴様には答える義務がある。」

「焦らないで。これは絶対では無いの！上条当麻。世界を見たくない？」

「…どういうこった？」

「世界は広く未知であり同時に無知でもあるわ。…これはワタシか

らの提案。この世界とは異なる世界を知りたくはないかしら？」

「「！！？」」

「この世界は争いの風に満ちていた。そしてコレから知る世界も同じ風が吹くわ。この世界に居るも良し。異世界に渡るも良し。…残念ながら考えている時間は少ないわ。」

「…当麻が居なくなっちゃうって事？」ボソッ。

「貴様には重すぎる！断れっ！上条当麻！！」

「先程も言った様に、絶対では無いの。この世界は貴方を必要としている。…でも…ワタシは貴方がフィアンマに伝えた言葉が胸に響いているの。この人なら救えるかもって。」

「その世界でも…泣いてる奴が居るのか？」

「そうね。でも彼方にも救いの御手は現れるはずよ。」

「じゃあ、向こうの世界を知ればこの世界で泣く奴がいなくなるのか？」

「……少なくなるのは確実よ。」

覚悟を決めたのは表情を見れば明らかだった。そして、一歩を踏み出したとき、腰の辺りが重く感じる。

「行っちゃう……の？」

涙目だが真っ直ぐに己を見つめる御坂に、この世界への未練を初めて感じる。

「…あぁ。」

彼女の頭に左手を乗せ、短いながらも別れを済ませる。
そして。

「…居るんだろ？土御門！」

「ニャー。カミやんにあるまじき鋭さぜよ。…出ていくタイミングが掴めなくてにゃー。」

「鈍感で悪かったなっ！御坂が教えてくれたんだよ！ま、何となくお前だってのは勘だがな。」

「その勘がいつも働けば頼りがいが増んだがにゃ～。…ま、それはそうと…。」

「俺は前にも忠告した筈だ。お前の右手だけじゃ、ちっぽけなお前だけじゃ、全てを救うなんて無理だとな。…で、今度は世界を救うだと？夢を見るのも大概にしろっ！上条当麻！！」

「…やっぱ聞いてたか。前にも言ったかも知れねぇけど、んな大層なもんじゃねーよ。今回ばっかはスケールがデカイけど、オレに出来る事なんて変わらねー。困っている奴がいたら、ただ動くだけさ。」

「それが身の程知らずって言ってるんだ！お前の助けが必要な奴等を見捨てるんだろうが！？」

「…土御門。オレ、思ったんだ。確かにオレは人を助けて感謝されてって。付け上がってたかも知れねぇ。でも、オレがそうした奴等

って元々の強さがあったんだ！オレは只背中を押してやれただけだってな。だったらよ、それを続けてりゃいいんじゃねぇか？今だってオレが押し続けてる訳じゃない。
オレは信じてるんだ！ソイツの強さを！ソイツが築いてきた周りの奴等を！オレが少しの間くらい居ねぇからって弱くなるってんなら、そのふざけた幻想をぶち殺す。ってな！」

「言ってる事がメチャメチャぜよ？カミやん。…ふー、カミやんの頭の悪さと頑固さは異世界に行った所で治りそうもないにゃ～？」
「！？ほっとけよっ！…土御門。此処にいる御坂とフィアンマを…」

「皆まで言わんでも、任しとくぜよ！さっさと行って、さっさと帰って来るにゃー。」

「おぅ！！」

駆け出す後ろ姿を眩しく見つめながら、親友の無事を祈る。

（あんま無茶し過ぎんなよ？カミやん。…にしても、カミやんがフラグ建てた女共をどうかわすかにゃー。正直こっちの方が頭痛いぜよ？）

「待たせたなっ！んじゃ、頼むぜ天使さん！！」
「…上条当麻。貴様の選択にこれ以上、ケチはつけん。これは忠告として聞け！お前の右手はどの世界においても異質だろう。お前の正義を貫くのも大事だろうが、彼方の世界がお前の味方だとは信じぬ事だな。」
「…あぁ。肝に銘じとく！脱出経路はあの金髪グラサンアロハのハーフパンツに頼んであるからな。…お前も世界を感じてくれ！」

「フン。…また会おう。」
「あぁ！？」

上条当麻は駆ける。目の前にはガブリエルが作り出した漆黒が渦巻いている。

「上条当麻！この布で右手を覆いなさい。少しの時間なら誤魔化してくれるわ。」

「！？よっ！っと。
おらぁぁ！往くぜ異世界ぃ」
こうして己が右手に神の奇跡すら打ち消す［幻想殺し］を持つ少年は旅立った。
自らの奇運に負ける事無き様
これからも巻き起こる騒乱に負けぬ様
再びこの世界に立てる様
英雄はこの地を離れた

「……あの子。何の説明も聞かずに行っちゃったわ……。」

神殿に流れる空気を後にして！！

とある世界（後書き）

えー、これにて上条当麻の「とある世界」は一端の幕引きです。

何か某週間少年誌の打ち切りみたいになってますが、まだ続くんでお付き合い頂ける方はどうぞよろしくですm（＿＿）m

次話にしてようやっとクロスかな……？汗）

第2章開幕　遭遇

「全くせっかちな子ねぇ？」

「…ミーシャ。…ワタシは…」

「全くだぜい。もう少し地に足を着けて貰いたいもんだにゃー。」

「貴方は確か土御門って呼ばれてたかしら？」

「おっ？大天使様に名前を憶えて頂けるとは光栄だにゃー。まー、カミやんに言われた通り二人は無事に脱出させるぜよ。」

「ミーシャ！ワタシ…」

「おっと！そこまでだぜい。超電磁砲。」

「…えっ！？」

「お前の役割はもう終わったって事だにゃー。言う事聞かないってのは、ねーちんから聞いてるぜよ？ここは大人しく引いて貰いたいもんだにゃー。」

「ッ！？ふざけないでよッ！」

「…ふざけてるのはお前だ！超電磁砲！
お前は学園都市第3位で常磐台のエース。お前みたいな表の有名人が行方不明ってだけで騒ぎになっている。これ以上、音信不通が長引いてみろ。お前を知る奴等が捜索隊やデモを決起するのは目に見

えている。」
「うっ！？そ…れは…。」
「これは既にお前のでしゃばる範疇を越えている。お前が此処に居るだけでも政治的判断が揺らぐ原因にもなっている。これ以上、お前に行動されては学園都市、引いては日本が危機に曝されかねない。異論は認めない！ガブリエルも其れで良いだろう？」
「ええ。異世界への扉を開いた上に、この世界の重要な因子を送り込んだのだもの。いくらワタシでもこれ以上の事は出来ないわね。」
「そんな…！？」
ミーシャならば或いは。と思ったが色好い返事は貰えそうも無い。それにこの土御門舞夏の義兄の言っている事は全て正しいのだ。最早、孤立無援と化した御坂美琴に思いもよらぬ助っ人が登場する。
「フィアンマ。お前もこちらの指示に従って貰おうか。」
「…承知した。…と、言いたいところだが…。」
いつの間にかフィアンマは土御門の背後に立っており、言葉を言い切る前に土御門の首を己が両腕で固定する。いわゆるチョークスリーパーである。
「グッ！？まさか…ここでこんな行動に…出る…とはな！一体…何のつ…もりだ！？」
「何。ちょっとした出来心ってやつさ？おいソコのガキ！」

「え！え？」

「お前に問おう。上条当麻についていきたいか？」

ストレートな問いに御坂美琴は答えられ無い。つい数分前ならば即答出来たかもしれない。

だが今は…。

「ワ…タシは…。」

涙が出る。

自分の本心をぶち撒けたい。だが、自分がこの世界から居なくなれば…。自分の大切な人達が頭の中で繰り返し現れる。

涙が流れる。

このまま考えるのを止め、あの渦の中へ飛び込めたら、どれだけ楽だろうか。だが御坂美琴はソレが逃げているだけだと判っている。自分を含めレベル５の能力者は学園都市内の自由しか与えられない。中には学園都市のなかですら行動を抑圧されている者も居るだろう。まだ幼いながらも自身の利用価値はある程度認識している。ならばこれ以上は、迷惑をかけるだけでは済まされないだろう…。

涙が溢れる。

こんな時でも御坂美琴は上条当麻を想わずにはいられない。アイツはあの短い時間で進む事を選んだのだ！迷いが無かったハズはない。それでもアイツは自分の道を、しがらみを即座に振りほどき進んだのだ。

「考えているだけあの男よりは遥かにマトモだ。だがな！残された

時は予想よりも短いぞ？お前がまだ迷うのならば聞け！それ以外ならば耳を塞げ！」

「…聞くわ！」

「良かろう！…アヤツの身を心配するのは余人にも出来よう。が、今アヤツを追い掛けられるのはお前以外に誰がいる！？」

「……アリがと。」

遂に御坂美琴は決心した。ロシアに来たとき以上の覚悟を抱いて。

「ありがとね。3人とも。それにミーシャも。」

御坂からの言葉に約3名が驚く。

「ありゃっ！バレバレだぜよ？まー、このオッサン頸動脈以外は全部決まってたから苦しかったのは本当だぜよ。しっかし、3人目ってのは誰の事かにゃー。」

「土御門さんが襲われた時、もう一人が動かなかったからね？何かあるんだろうなーって。」

「…そこまでとはな。超電磁砲の面目躍如ってとこたい。」

「貴方も大した役者振りだったわね？」

「…貸しが出来たからな…。捲き込んだのは俺様だ。」

「ひょっとして、ソレがミーシャを狙った理由？」

「……すきに考えればいい。俺様が此所で出来る事は本当になくなった…。」

「此所で…ね？貴方の行く末を祈るわ。願わくば彼の言葉通りに…。」

「…礼を言っておこう…。」

「ねぇミーシャ？貴女がまだ維持してくれてるのよね？…猶予はどれぐらい？」

「良い顔してるわ。美琴。…渋ってる様だったら、彼への届け者を理由にしようと思ったのに？」

「フフ。ちゃんと考えてくれてたのね？」

「ワタシは何時だって貴女の味方のつもりよ？
そうね？あと１０分ね。」

「ＯＫ！…ねぇ、土御門さん。」

「…情報操作はコチラに任せろ。お前の親くらいには確実な生存を伝えておこう。」

「…いいの…？」

「まー、本人次第だからにゃー。…骨が折れるが、カミやんの世話

代としとくにゃー。それに超電磁砲の熱烈なファンがいるから、何とでもなりますたい。」

「そうなの？じゃあ、その人共々ご迷惑をかけますがよろしくお願いします！」

「任しとくにゃー。今なら［お兄ちゃん］と呼べる権利もつけてあげますたい。」

「…アンタねえ！土み…舞夏に言い付け…」

「ソレだけは平にご容赦をーっ！！」ドゲザーッ！

「分かったからあの馬鹿みたいなことしないでよっ！…あと、黒子…。風紀委員第１７７支部の白井黒子に伝えて欲しい事があるの。」

「…ジャッジメントか。人伝で良ければ預かるにゃー。」

「それで構わないわ。…もしワタシが帰ってこれ…ウゥン…ワタシの居ない間の留守は…これも違うな。

……人が居ないと思って勝手にクローゼット漁るなっ！って言っといて！」

「ハハッ！確かに承ったぜよ！カミやんの事頼んだぜい。基本、涙とお願いに弱いから攻めまくるにゃー。」

コレで両親と学園都市、可愛い後輩への配慮は済んだ。後ろ髪引かれまくりだし、最後に、とは言わないが旅立つ前にもう一度皆に会いたかった。

「気持ちは判らんでもないが時間だぞ。」

「フィアンマさん…。ねぇアイツは何をすれば、その…世界を救えるの？歪みっても。」

「貴様ら…いや、今では俺様も含めた人間には、何も出来んさ。あの男とお前のやりたいようにやれ。恐らくはそれが正しい。」

「ウン。わかったわ。後押し。感謝してる。」

「…子供を作って還ってくればインパクトは大きいぞ？」

「ワタシはまだ中学生よっ！！」

彼方の世界での指針も朧気ながら立った。
しかし、セクハラだぞ。神の右席のリーダーさま。

「お待たせ！ミーシャ！」
「ジャスト5分。やるわね？
さてワタシから幾つか伝えるわね。まず、この世界への帰還。この腕輪を肌身離さず持っていて頂戴。大丈夫だと思うけどなるべく「幻想殺し」には触れさせないでね？
安心して。抱き合って寄り添う分には問題無いから。
帰還の際にはこの腕輪に触れながらこの言葉を言って頂戴。」

物凄い事を平然と説明しながらも美琴の頭に手の平を翳す。

《正しき歴史へ
神の力と雷に於いて上条当麻と御坂美琴を絆の元へ
送り賜恵》

「…今の何語？…発音出来るかしら……？」

「コレで良いわ。言霊に熨せて貴女の魂に届いた。再びコチラに戻るまで忘れる事は無いわ。美琴がその時だと感じたなら自然に出来るから大丈夫よ？一回だけの奇跡だからアナタ達が納得してからお使いなさい。」

「わかった。…フゥ、一番の懸念は片付いたわね。」

「そうね。それから最も気をつけて欲しいのが彼方の世界が敵の方が多いと言う事。…言い方が悪くて申し訳無いのだけれど、アナタ達は彼方の世界にとっては異物なの。衣食住については神託を通して彼方の一番信頼の於ける人物に用意させるから、コレから送るその場所に着いたら、彼方のルールに従って欲しいの？」

「あんま好き勝手やるなって事かしら？」

「イイエ。ソレではアナタ達が行く意味が無いわ。あくまでもステージは用意されるまで待って！あとは好きなように踊れば良いわ。」

「ンー。そうじゃなくっちゃね♪」

「…それからコレを。」

「…綺麗ぇー！」

ガブリエルの両手から発現したのは、百合を象った黄水晶（シトリン）だ。手触りは鉱石だが、その透明度は比肩出来る物が難しい程だ。ガブリエルのシンボルに象られているにも係わらずどの角度から見ても、歪みが全く無い。

「ワタシからのせめてもの品よ。試しに電気を送ってみて？大丈夫。傷なんて付かないわ。」

「？クォーツを発生させろって言うの？」

「水晶振動子？だったかしら？そうね。電界を印加して圧電効果を得ると言う事に関しては正解よ。もっと威力を上げてみて。ワタシの依り代を造った時のように！」

「ウ、ウン。」

言われるままに、電撃の出力を上げていく。すると、

ィィィイリリリリリリ

キィィィィィィィン！！

「嘘ッ！いくら振動子ったってこんな大きい共鳴現象…！？」

「もう良いわね。そうねぇ？美琴。翼をイメージしてみて。」

「翼っ。ん～と、こう？」

耳を塞がんばかりの高音がピタリと止み、美琴の手には横巾３ｍはありそうな翼が出現していた！

「…ナニ？……コレ？」

最早、御坂美琴は考えるのを止めた。

（だって考えたって無理！！）

…おっしゃるとおり。

「美琴ー。そのまま自分の一部だと思って動かそうとしてみてー。」

「ハイハィ…。まぁ、翼だし、羽ばたく？」

その瞬間、翼は意志を持ったように美琴の背部へ向かう。

その様はまるで、

［やあァァァァってヤるぜェッ！！！］

であった。

そんなファイナル御坂美琴はと言うと。

「ふぇっ？」

飛んでいた。

ポカーンとしている地上の二人（＋一人）を他所に、ガブリエルだけは満足そうに何度か頷いている。

「美琴ー。そのままあの崩れた壁に翼も使って、攻撃してみてー。」

真下からの声に、

「ＯＫェー！」

ノリノリで応える美琴であった。既に成るように成れな状態だったので、順応性は恐ろしく高くなっていた。イヤ、この笑顔を見ていると、元々こういうのが好きなだけかも知れない。

指示された場所へ攻撃をしてみる事にした美琴は何時ものように雷の槍を作り出そうとすると、シトリンの翼がまたもや共鳴する。

…放電と共に。

「コレって、もしかして？うん。…イケる！」
美琴の意志に応じて翼は拡がりを見せる。
「いっっっっけぇェ！！」
ズッ！ゴォォォォォン！！
正に雷の狂嵐！今回はさながら、鉄の偉大な勇者である。轟音と震動が石壁を襲う。周囲には瓦礫が見当たら無い。どうやら塵と化した様だ。
「想定していたよりも威力があるわね。ワタシとのシンクロニティが高いのかしら？
ソレは貴女のイメージ通りのモノに成れるわ。貴女までも危険に晒す代償だと思って頂戴。」
「ありがと！！最っ高よ！コレ！？」
「使う相手はくれぐれも選んでね？消耗も激しいのだから。」
「そうね。使いこなせるにはまだまだみたい…。」
「…美琴。ワタシには此れくらいしか出来ないけ…」「やめてよミーシャ！ワタシはワタシにしかやれない事が出来て幸せなの。だから……このまま見送って頂戴！？」
「…わかったわ。
…それじゃあ、ワクドキ［受胎告知］のお時間よっ！」
「…ワタシの気遣いを返せ…。」

「まー、そう言わずに。
そうねぇ。確かに貴女にはまだ早いから告知と言うより先告かしら？
貴女が彼と結ばれ祝福される生命は女の子よ♪で、次が男の子♪そ
れから…」「なっ！！！何言ってん…。……でも…最初は女の子か
ぁ。きっとパパ好きね？髪質は似ないと良いけど。ツンツン頭はち
ょっとねぇ？男の子の方はアイツに似て単純で優しくて、顔立ちは
ワタシに……」
「フフフッ。まだ誰とは名指ししてないのにね？
…いってらっしゃい、美琴…。
出迎えには間に合う様にするわ。」

「ハッ！？…ミーシャったら、もう！
ウン。いってきます！」
「タイムラグがあるから百合の示す方へ進んで頂戴ー！」

やや軽いノリではあるが、けして興味半分でいるわけではないのは、
渦に入る瞬間にこちらを向いた表情で解った。
見送りの者達へではなく、もっと大きな何かに向かって微笑みを浮
かべたのだ。白井黒子が此処に居れば
「あれはお姉様のいってきますの挨拶の様なものですわ。」
と確信しただろう。位置的にはガブリエルにしか見えなかったが、
あのような顔を見れば誰在ろうと、帰還を疑う事はないだろう。
そんな微笑みを残し、学園都市の英雄は旅立った。

「さて、土御門。」

「はっ！な、何だ？」

多重スパイには珍しく隙だらけだ。まぁ、あんなもの見せられれば誰だって呆ける。

「限界が近づいているわ。
脱出の準備を！
それとフィアンマが強大な魔術師に狙われているわ！可能ｊｔｎナカａｖｍギリｊｍ…ｗｕトオｐｇｊｍク…ａｄｎｗへｗ…ｍｊｔ」

「！！結標っ！！今すぐ跳ぶぞっ！…３回短距離を跳んで撹乱しろ、その後にイケる所までエリザリーナ共和国の近くへ！」

「へっ！？…あ？ええ！」

「グズグズするな！行けっ！！」シュン

色々とガブリエルに問い質したかった土御門だが、大天使の忠告を信じて脱出を優先させた。
テレポートが発動する直前に彼の目に止まったものは、閉じていく黒渦と消えかけているガブリエルだった。誰一人居なくなった空間で大天使はゲートが閉じたのを確認し、上条当麻と御坂美琴が旅立った方向へ

「どうか。…あの二人にどうか神の御加護を。」
ノイズの交じらない美しく澄んでいるが、心からの慈悲をふくんだ言葉を後にその姿を消した。
同時に崩壊が開始された。［神の力］の加護が無くなりベツレヘムの星は完全崩壊を迎える。
しかし、瓦礫の崩落と落下の恐怖を他所に先程まで神殿であった場所に一人の魔術師が虚空を睨み付けていた。

「［幻想殺し］を利用されたばかりか、私の行動までをも封じるとはな。…天使如きがやってくれたものだ！！
こうなれば如何なる手段を以てしても［プラン］の補填を考えねば…。」
そこに居たのは学園都市統括理事長であり嘗ての最高最強最悪の名を欲しいままにした魔術師
アレイスター＝クロウリーであった。

「…フィアンマは逃げたか？滞空回線が無いのはやはり不便なものだな…。まぁいい。
あいつ程度ならば“アレ”の正体など解明出来んさ。」

謎の言葉を残して、アレイスターは姿を消す。
学園都市の平穏はまだ訪れない。
例え上条当麻がこの世界に残る選択をしていても、平穏無事な生活は出来なかっただろう…。

？？？

「しっかし、何なんだ？ココは？暑くも寒くもねぇし、上か下か進んでいるかすらワカラン！？」

上条当麻が愚痴を言っているこの場所を何と表せば良いだろう。
亜空間？次元の狭間？異相差空間？時の繋ぎ目？
光は一切無く深海の様だ。
海底との大きな違いは生命の息吹が全く感じられない事だろう…。

「あーっ！！いたいた！？や～っと追いついたわ！」

と、思いきや生命反応が向こうからやって来た。

「まさか、御坂か！？」

上条当麻にとっては御坂美琴が此処に居るのが不思議でならない。

「馬鹿野郎！！何だってこんなトコに…。いや、んなこたどうだっていい。今すぐ引き返せっ！」

確かに誰かに会いたいと思っていた所だが、こんな場所での邂逅を喜べる筈がない！

「…やっぱりそういう反応よね。」

誰よりも他人が、特に顔見知りが傷つくのを嫌がる男だ。予測範囲内の言動であった為に平然と構えていられる。

一方、いつもの様な態度が出てこない事を訝りつつも、尚、退去を促す。

「聞いてんのか！今すぐ引き返せっ！！オレが行こうとしてるトコはヤバいかも知れねぇんだ。此処だって安全とは言い切れねぇんだぞ！天使さんがあの渦閉じてなきゃいいけど。」

「ハン！そんな心配は無用よ！知ってるわよ。全部。」

「なら判るだろ？お前はこんなトコにいる必要はねぇんだ。この世界に残って…」

「何しろっての？」

「何でもやれば良いじゃねぇか！お前にゃ輝かしい未来ってぇのが待ってるだろうが。ソレが性に合わないってんなら好きな事でも始めりゃいい。」

ボソッ「だから此処にいんのよ。」
「それはそうと。アンタに聞きたい事があるんだけど、アンタどうやって帰るつもりだったの？」
「そりゃお前…。敵の親玉倒せば…こう…ジュワッ！…と？」
「敵って誰よ？そもそも、向こうでキャンプでもするつもり？当面の活動拠点とか身分証明とかどうするつもりだったのよっ！」
「だーっ！もう、向こうに行きゃー何とかなるだろうが！」
「呆れて物も言えないってのはコレの事よね？…ワタシの右腕をよく見なさい！」
「ウン？二の腕に輪っかがあるな。」
「アームレットってぇのよ…。腕輪なりバングルなり他にも言い様ってもんが…。まぁいいわ。アンタにも判る様に言うと、コレが帰る為の道具よ！」
「あー、そうなのか？…んじゃ、こっちに渡してくれ。…わざわざ悪かったな。さっきの言葉通りならまだ戻れるんだろ？」
「戻れないわよ？それはそうとアンタは情報を全然持ってないでしょうが！このアームレットだって発動の条件があるのよ！？」
「めんどくせぇなぁ。…って、待て！……戻れない…だと……？」
「えぇ。そう言ったわよ？」
「お前さっき心配無いって！？馬鹿野郎！何でこんな真似しやが、

ムブッ！…」

「いいから黙って聞きなさい！さっきも言った通り、アンタは情報が無さすぎよ！アンタがこれから挑む事は行き当たりばったりで成し遂げられる程度なの？」

「……」

「ワタシだって覚悟を決めたわ。アンタに付いてく。ウゥン。ワタシも世界を救う！勿論、両方ね！！」

「みふぁか…。」

救世の英雄達の出発点である。
女の子が男の子の口を鷲掴みしているちょっと情けない絵面ではあるが、鈍感男とツンデレ女の二人には互いを認め合う大いなる一歩であった。

「みふぁか、ほろほろふぇを……ブハッ！ふー。わかったぜ、御坂。ホントを言うと、巻き込みたくは無かったけど…、こうなったら一蓮托生ってな！」

「ウン。よろしくね！」
「ただし、無理は絶対すんなよ？」

「……アンタに言われても…ねぇ…。！！
…何か来る！？」

「…！？何かって、こんなトコでか！」

結束も新たにと言うところで、御坂が何かしらの反応を捉える。

「…早速、敵さんか？」

「わかんない。…けど、“ナニか”よ！」

言葉をおえた瞬間、激しい悪寒を両者に与える影が迫っていた。

［……ノレ……ミコト……ノオウ…ケモノ……］

「！！？」

上条当麻が今までの経験から培った［予知］ともいえる勘が、絶対の拒絶を与えていた。

が、目の前の“ナニか”が発した［ミコト］という単語が彼の足を前に進めた。

「てめえ、御坂に何か用かよ！？」

御坂美琴を背後に庇い、アンノウンに問いかける。依然身体の震えは止まらない。以前にもこの恐怖を感じた事があるが、靄どころか、闇が覆うように記憶が見えない。

それもそのはず、その恐怖は彼が記憶を失う前の事。

［自動書記］が覚醒し、次元の裂け目から垣間見た時のモノだったのだから。

［……セイメ…ンナ…ショ…ザワリ……消エ去レ…］

暗きこの場所においても尚も黒いその影は明確な殺気を以て、上条当麻の問いに応える。

「ハァッ！」

パァァァン！

影の異常さを察知した美琴はシトリンを楯の様に展開し、問答無用の一撃を防いだ！

「クッ！？こんなのワタシの方がモタナイわ！」

御坂美琴が防ぎ、上条当麻が攻撃と防御の為に、右手の布を外そうとした時、明らかな重力を感じた。

「コレって……？」

「何だかわかんねぇけど、アレからは距離をとれたぜ！」

上条の言葉通り、謎の影からは引き離されて行く。

残心を怠らなかった二人は共に感じた。

影が笑っているのを。

その笑みは獲物を取り逃がした自嘲ではなく、又の機会を確信しているモノであることを。

「…アイツ……。」

「……あぁ。多分また遭遇する事になりそうだな…。」

とりあえずの危機は脱したが、引っ張られていた感覚は落下する感覚へと変わっていた。

「…出口っぽいな？」

「予定されてた場所だと良いんだけど…。」

二人はようやく異なる世界へと辿り着いた。
そして、こちらの世界で初めてみた景色は、
……地獄絵図だった。

燃え盛る村。
遠くに見える異形の存在。
石と化した人間。
絶え間無く聴こえる絶叫。
そこにあるのは、赤く歪んだ風景が広がっていた！

「…酷い……」

ギリッ！！
御坂美琴は余りの状況に呆け、上条当麻は言葉の代わりに拳を握り絞めていた。

「行くぞ！御坂！！
こんなもん、このままにして置けるかっ！！」

「……そうね。細かい事情はこの事態を片付けてからにしましょう！」

駆け出す二人だったが、ある人物の言葉にその勢いを削がれる。

「オイ、お前等は何者だ！？」

第2章開幕　遭遇（後書き）

クロスは出来たけど先っちょだけでした……ｏｒｚ

ナギ＝スプリングフィールド

その人物に対して二人は同時に考える。

（（どっちだ！？））

と。

声をかけた人物も同じ考えのようで一定以上の距離を開けたままだ。

膠着状態が続くかと思いきや、

「…ハァ、ヤメだ。めんどくせぇ。…オイ、あんたらがあの化け物共とお仲間だってんなら、かかって来いよ！

違うっつうなら早く逃げな。途中で無事な奴がいたら保護くらい頼むぜ？」

持っていた杖を肩に乗せ、［お前等次第だから早く行動に移せ］とでも言いたげに、こちらを見ながらおどけている。

「どうする？」

赤茶けた髪の男の言う通り此所で時間を無駄にする必要はない。事情を説明するよりも逃げた方が話が早い。だが、この惨状を放っとくつもりもない。御坂としては、救助に向かうらしい男性に共闘を申し出るか、この男性に構わず助けに向かうかを問いたかったのだが、

「御坂は何言ってんのかわかんのか！？」

別次元の方向で悩む上条に呆けるしか無かった。

「…アンタ…こんくらいの英語も分かんないの……？」

「ん？今の英語だったのか？」

「……。」

ここからは上条さんＥａｒ！！

「Ｈｅｙ！Ｃｅｒｒｏ　ａｓｋｅｄ　ｔｏ　ａｎｓｗｅｒ？」

「Ｗａｉｔ！！Ｙｏｕ　ｗａｉｔ　ａ　ｍｉｎｕｔｅ！　Ｎｏｗ，ｅｘｐｌａｉｎ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｇｕｙ　ｆｒｏｍ．　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｇｏｏｄ？」

「…Ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｐｒｉｎｃｉｐａｌｉｔｙ　ｔｈｏｕｇｈ　ｗｅｒｅ　ｎｏｔ　ａｂｌｅ　ｔｏ　ｔａｌｋ　ａｂｏｕｔ　Ｅｎｇｌｉｓｈ？ｆｕ－Ｍａｋｅ　ｆａｓｔ．」

上条の何か言いたげな視線は無視して、本題に入る。

「私達を疑ってるのは間違いないわ。でも一刻も早く救助に行きたいのは、この人も同じみたい…。」

「なら話は早ぇ！一緒に行動するよりもバラけた方が良くないか？俺達は事情がわからないから、戦いより救助優先でいいだろ？」

「…アンタ私達が疑われてるって事、判ってる？…ハァ…。いいわ。何とかハナシつけてみる。」

ン。こッからは面倒臭ェから日本語で書くそォだ。

「…待たせたわね。ワタシ達に敵対の意思はないわ。出来れば私達で助けに入りたいの。」

「おー。そりゃありがてぇ。んじゃ、すぐに行ってくれ。ココだと巻き込まれるぞ。」

「え？ちょっと…」

目の前にいたはずの男性が言葉だけを残し、姿が消えていた。上条当麻もロストしたようで二人共に辺りを見回す。

ドガァァンッ！！

するとある方角から爆発音が聞こえてきた。
その音は留まる所を見せず、遠目にも戦闘の様子が伺える。
今の爆発を起こしたのが先程の男性とは信じたくなかった。
…そう。信じたくはなかったのだ。二人が彼の姿を見失ってから数秒。長く見積もっても１０秒と言ったところか？
そして、爆発があった場所までは１ｋｍは離れている。
「冗談じゃねぇぞ…。あの一瞬で？」

「能力者でもあのくらいの移動は出来るでしょ？ワタシ達も行くわよ！」

内心の動揺は隠し、救助へと促す。

そう、確かにあれくらいの移動ならば学園都市では珍しくない。
先の神殿に居た結標淡希ならば８００ｍ程の距離を瞬時に移送出来るし、一方通行ならばベクトル操作で同じ時間での移動が可能である。［根性］でとんでもないことをしでかす熱血漢も出来るだろう。
ならば、御坂美琴は何に動揺したか。

一つはファーストコンタクトで出会った男が超能力者なみの移動を見せた事。
なにしろこの世界での基準は強制的に彼となる。
レベル５クラスが当たり前の様に存在するとなると、元の世界への帰還率がぐんと減ってしまうのだ。

そして、もう一つ。
彼が時折みせる雷の攻撃だ。電撃のエキスパートでもある美琴だからこそ気付けたのだが、彼女が使用する雷よりも、密度が濃いのだ。
この二人は知らなくて当然だが、この世界には魔法が存在する。
詠唱を唱え、自らの魔力と精霊のチカラを融合させるこちらの魔法は、法則を無理矢理に適用する、とある世界の［才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術］よりも、進化した完成形とも言えるだろう…。

御坂の分析では、出力では勝てるが、威力では劣っていた。
百合の黄水晶を持ち出せば威力・出力ともに凌駕出来るだろう。が、如何せん熟練度が足りなすぎる。
理由はどうあれ、異形に襲われた村へ単身で乗り込んできた程の男だ。ぶっつけ本番の隙を見逃す筈がない。
もしかしたら勝てない？…では、
（ワタシはコイツの。…上条当麻の役に立てるのだろうか？…戦闘以外でワタシの役目なんて…）

「…坂。オイ、御坂！どうしたんだ？」

「えっ！？ごめん。何？」

思慮の檻に捕らわれつつあった御坂はいつの間にか立ち止まっていた。

「オイオイ、間抜けは上条さんの専売特許ですよー？頼りにしてるんだから、疲れた～。何てのは後にしてくれよ。」

「えっ！」

今一番聞きたかった事をさらりと言われてしまった。

「…にしても、さっきの人凄ぇなあ。これだけ戦闘音が絶えないって事は、やられてるって事は無いんだろ。心強い味方が出来て助かったぜ！」

「えっ！？」

「えっ！？て、お前…。オイオイオイ、美琴センセーはこんなトコでも勝負勝負かよ？…そりゃ、信用するまでは行かないけどさ、目的は一緒なんだろ？だったらまずはそれに専念しようぜ？そんで、ちょっくら休憩とってこの世界を知ろうじゃねえか。」

「アンタ…。」

「ハッ！まさか既に勝負申し込んでるとかか？」

「しないわよっ！全くっ。でも、そうね！出来る事からやりましょ！！！何この反応！？アタシの後ろよっ！」

「オウッ！、おいでなすったか！？って、でけぇ、何じゃこりゃあ！？」
「2体！後ろの奴は任せてっ！電撃飛ばすから巻き込まれんじゃないわよ？」
「OKぇ！」
それは初めてのコンビネーションだったが、予定調和の様に見事なものだった。迫る二匹のレッサーデーモンと真正面から相対し、上条が御坂の壁になる。
［グオォォン！！］
「当たるかよ、っと。御坂！」
「ナイスよ！」
［ギャウ！？］
先頭の悪魔を上条が惹き付け攻撃を逸らす。と、同時に御坂がスライドし、雷の槍を予告通り後方のレッサーデーモンに直撃させる。その光景に逆上したか、先頭の一匹が御坂へと目標を変える。
「！？ドコ見てんだよ？デカブツっ！」
パキィィン
［グォッ！！］
上条当麻の右ストレートが悪魔の脇腹に刺さる。
この世界で初めて使用した［幻想殺し］

（いけるっ！）

この世界でも効力はあるようだ。レッサーデーモンを一撃で魔界に還した上条だったが、上空から迫るもう一匹には気付かない！

そのまま上条を押し潰さんと音もなく急降下する。

「うおっ！？上からもかよ？」

上条の声には驚嘆の響きはあるが焦りの色はない。

それもその筈、地上４ｍ程の高さで上条の周囲の地面から生えた幾本もの槍に刺し抜かれ、醜いオブジェと化していたからだ。

「ぼさっとしてないで最初の２体目にトドメをお願い！」

「いっ！まともにアレ喰らってんのにまだ動くかよ？」

砂鉄槍の間を抜けて、御坂の電撃が当たっても立ち上がろうとしている悪魔に走り寄る。

「しつけぇっての！！」

地面すれすれまで拳を落とし、二匹目まで１０ｃｍの所で体のバネごと跳ね上げる。

「喰らいやがれッ！」

お手本とはかけ離れているが、荒々しくも綺麗なフォームでレッサーデーモンの顎に渾身のアッパーカットをヒットさせる！

御坂はほんの一瞬だけ上条に見惚れ、次に上条の一撃に対抗心を燃やす。

「…ホーントタフなのよね、ソイツ等。でも、これならどうかしら？」

行動を止められたのも数十秒。砂鉄槍を途中でへし折り、御坂へと襲いかかる。対して御坂の方は準備万端。親指でコインを弄り、弾道を調整している。

「…アンタ達がどんな生物かは知らないわ。でも、この現状とワタシ達を襲った事で十分よ！

デェリャアアァァァッ！」

手加減無しのレールガンは見事命中し、悪魔を押し飛ばし塵へと変えた。

「……近くにはもういないようね？」

先程の奇襲の二の舞を防ぐため、自らの能力限界までセンサーを拡げる。

「おっ！？そっか！見事俺達の初勝利って訳だ！やったな。やっぱ頼りになるぜ！」

「フフーン。どんなもんよっ！アンタも流石ね？」

赤面しながらも満面の笑みで答える。

共闘と戦果も勿論、御坂美琴は先程の悩みを見事吹き飛ばせた結果の笑顔だ。

（何をうじうじと考えてたのかな、ワタシ。
そうよ！戦い以外でだって役に立てる。多角的な用途こそがワタシの能力の真骨頂！！誰に何を言われたってコイツの役に立って見せるんだから！
戦いだって今みたいに一緒にやれば良いしね？敵わなければ逃げればいいわ。）

「まぁ、何とかなったな！…けど、気付いてるか、御坂？」

「……悲鳴の事……？」

「…あぁ。聞こえなくなったよな……？」

「「……。」」

勝利の余韻も束の間。重苦しい沈黙が流れる。

「…こうしてても仕方ないわ。何か行動に移しましょ？」

「そうだな。…さっきの不意討ちのこともあるし、アソコに行ってみないか？」
「アソコって、あの丘の事……？
！？そっか、見通しが良いから偵察には良いわね！化け物の警戒も出来るし、ってアンタもたまには賢いわねー。」

「どーせ上条さんは落ちこぼれですのことよ～…。」
「いや、そんなにおちこまれても！とにかく行きましょ！ねっ？」

御坂に左手を握られ強引に小高い丘へ向かう。途中で握る力が強まり、いつの間にか手首から掌になっていた。

偶然か？と、上条は考えたが、それが間違いであった事は前を進む御坂の真っ赤な耳を見れば明らかだ。短い道中ではあったが、約１名はとても満足げな様子であった。

「……なァ、あの黒い塊って…。」

「……雷雲みたいね…。」

丘から見えた光景はまさに雷雲。群がった悪魔達が雲ならば、雷の様なものはおそらく先程の男性の攻撃だろう…。

「おら、もっと来いよ？こんなもんじゃ気晴らしにもならねぇぜっ！」

喋りながらも敵を蹂躙しまくる。

炎の魔法で後方に壁を作り、雷の魔法で前面の集団をまとめて喰い尽くす。

上空からの攻撃には１００近い魔法の矢で迎撃し、光が収まる頃には右方の集団へ向けて遠当て…とは言えない程のレーザービームの様な気攻を放つ。間髪入れず左方の敵に魔力を込めた杖を投擲し、怯んだ所へ接近戦に持ち込む。瞬動と必殺の当て身を繰返しながら撃破していく様は［終末を呼ぶ獣］の大波を連想させる。

間合いに悪魔が居なくなれば［メア・ウィルガ］の言葉で杖を呼び寄せ、新たなる獲物に近付き、戦闘を開始する。

攻撃方法こそ少ないながらもその攻撃パターンは多彩で、その時に何をすれば良いのかを把握した動きは正に百戦錬磨の言葉通りであった。

「…人の生まれ故郷に！俺達の息子に！！大切なもんに手ぇ出しや

がったことを魔界に還ってからも震える程後悔させてやる！！」

烈震のような気迫に下級とはいえ成人の何倍もの巨躯を誇る悪魔共が小動物の様に震え出す！

その様は［マギステル・マギ］ではなく、［Ｄｅｖｉｌ－Ｍａｙ－Ｃｒｙ］が正しかった。

中には本当に逃げ出そうとする奴までいるが、今の彼からその望みが叶うはずもない。

「まとめて消え去れ！」

ズ！ゴォォォン！！

恐らくは［千の雷］。

恐るべきはシトリン使用時の御坂に勝るとも劣らない程の威力と、未だ破壊されていない民家や石化した村人と敵とを完全に判別している集中力である。

が、真に恐ろしいのは、本来は広域殲滅用ではないこの魔法を、全方位に放った事であろう！

「チッ！牽制程度で終わらす筈だったのにな…。」

あれだけの戦闘をこなしても息一つ乱さないまま、

歩み始める。

その足がふと止まる。その場所は恐らく避難所であったのだろう。

男性の視線の先には数多の石像が乱立していた。その殆どが恐怖に顔を歪ませ、その残りは、泣き顔や祈りの表情、そして、子供を庇ったのだろうか？

毅然とした顔で此方を見据えていた。

「済まねぇな。…間に合わなかったよ…。」

石像…、石化した村人達に話しかける。

「だが安心してくれ。…直ぐにとは言えねぇけど必ず救ってやる。…あんた等だけじゃねえ、世界の奴等をだ！オレじゃなくっても、続く馬鹿はきっといる！…案外、オレの息子がやり遂げてくれるかもな……？

だから……もうしばらく…待っててくれ…。」

物言わぬ村人達の前で固く誓ったこの世界の英雄、ナギ＝スプリングフィールドはその場を立ち去った。

村人達を救うため。

この様な惨状を繰り返し起こさせないため。

気高く頑固な愛妻と世界を平穏にするため。

…何より今は、苦労をかけ続けている息子の顔を一目見るために。

［サウザンド・マスター］の歩みは止まる事は無い。

出会い

「……すげぇ……。」

上条当麻はやっとの思いでその言葉を絞り出した。

暗雲の様に群がった悪魔共を見て、そちらの加勢に出向いた方がよいのでは？と、御坂美琴にアイコンタクトを送った所、数刻の後に頷きが返ってきた。

いざ！…と言うところで、雷鳴と眩い光り、そして、轟音が鳴り響いた。

発生源を見ると、あれだけの悪魔共が全て消え去っていた。

「……ねぇ？良く聞いて？……万が一さっきの人と戦わなきゃならなくなっても…」

「ああ。…逃げの一手…だな？」

「何があってもアンタだけは逃してみせる！」

「……バーカ。一蓮托生つったろ？」

「……そうだったわね。…うん。……って誰がバカだ、コラ！？御坂美琴様を捕まえてふざけた事抜かしてんじゃないわよ！」

「…こっちのカミナリ様も……すげぇ…。」

「まだ言うか！

？……！！ねぇ！あれ！」

「ん？生存者か！？行くぜ御坂！」

今居る丘より更に高い丘に3人程の人影が見えた。近づくにつれ、段々と詳細が見えてきた。大中小と揃った人影は、如何にもな魔法使いの老人と、御坂美琴くらいの少女、それとまだ3・4歳とおぼしき子供だ。三者共に疲労の色が濃く、１０m程の距離であるのに未だコチラに気付いていない。
敵を呼び寄せる危険はあったが、仕方無く大きく声をかける。

「オーイ、無事かー？こっちは敵じゃねえー！怪我してるとこあったら遠慮なく言ってくれー！」

「英語じゃないと意味無いでしょ！！…まずい！この反応はっ！？」

一番高い丘にいた3人からすれば、何とか安全そうな場所に逃れたと思ったら、今度は外国語で叫ぶ二人組がコチラに近付いている。正直堪ったものではない。当然警戒の為に身構えるが、その瞬間に顔つきを変え走り迫ってきた。

「クッ！ネカネ！ネギ！伏せておれ！」

「スタン様！？…あの人達も敵なのですか？」

「判らぬ。じゃが、だからこそ伏せておれと言っておるのだ！」

「わかりました…。ネギ。こっちに来て。……ネギ？…ヒッ！！」

「どうした？…ムウッ！こんな近くまで接近を許すとは！！」

また一難処ではない。すぐ目の前には明らかな敵。5匹のレッサーデーモンとそれを率いる1体。

後方からは、この村に居る筈の無い東洋人。この二人組までもが狙いをコチラに絞った場合、老人一人ではなす術がない。

（…万事休す…か？こうなってはあの悪タレの忘れ形見だけでも転移を…。魔力を全部使っても一か八かの博奕じゃな。…スマンの、ネカネ！役不足じゃがこの老い耄れが最後まで付き合うぞ！）

一人の老魔法使いが悲壮な覚悟を決め、子供は身を竦め、少女は子供を抱きすくめ眼前の悪魔から庇っている。

目標を確認した悪魔共のリーダー格は、石化の息吹を放つため、口らしき部位を大きく開ける。

「グヌ！そんな暇も与えてくれんか！？」

転移の詠唱が間に合わぬことを悟り、半ば反射的に子供達の盾になる。

（手と口さえ無事ならば、ネギを…。）

悪魔に背を向けたスタンが見たものは

バリリリリッ！

（［フルグラティオー・アルビカンス］…か！？…だが、誰が……？）

［白き雷］に似た放電だった。

雷は3人の頭上を通り越しリーダー格の悪魔に当たる。が、集中した魔力が霧散するのを感じられ無かった。

だが、そのおかげで発射のタイミングは遅れた。
この隙に転移呪文の詠唱を開始するが、

「うおらあぁぁぁっ！」

右手を突き出しミサイルの様に突進してきた黒髪の少年が、後方から飛び出して来たことで中断された。
東洋人の少年の勢いはなお止まらず、発動し始めた石化の息吹と相殺する事でようやく止まる。

「…間に合ったか！？」

「どうやらそうみたいね？…フゥー！ヒヤヒヤしたー。」

この二人は敵ではない！
突如として現れた救援に感謝をしたいが、

「敵はまだおる筈じゃ！気を抜かんでくれ！」

九死に一生を得た古強者はこのチャンスを不意にしたくなかった為、年若き二人をたしなめる。

「後ろのヤツ等なら問題ないわ。後はコイツだけよ！」

その言葉に敵の集団を見ると、

「……何と…。」

卵の様なのっぺりとした悪魔以外は地に倒れていた！

「何時の間に！？…何たる使い手じゃ…。」

「くたばっちゃ…いねぇよなぁ。後どのくらい、あの状態なんだ？」

「ウ～ン。さっきまでのデータ採りで急所らしきトコに当てたからねー？長くて１０分？」

「うーし。上等、上等。さーて、どう攻めるか？」

「やっぱ一番有効なのはアンタよね？牽制は任して。」

「お主等…。」

「爺さん。アンタはその二人を連れて逃げてくれ！…通訳よろしくっ！」

「ハイハイ…。てなわけよ？ここから逃げて。足止めくらいはきっちりやるから！」

「待ってくれ！お主等だけに戦わすわけにもいかん。…さっきの「フルグラティオー・アルビカンス」は、お嬢ちゃんじゃろ？中々の腕前じゃが、封魔の魔法は学んでおるか？」

先程までとは違い、戦える手数が増えた。ならば、と追いつ追われつを始めるよりは迎撃を選んだ。そこで老魔法使いは更に一計を立てる。

「フルグラビカンス？だかは知らないし、封魔だかも判らないわ？…ってか、魔法！？」

「……フム、やはりか？先程の術からは精霊の囁きが感じられなかったのでな。…しかし、魔法自体を知らんとは…。だが、一般人にしては…。」

「ねぇ！アタシも聞きたいことは山ほどあるけど今は、そんな場合じゃ。」

「…ウム。確かにの。」

「おっ？話はついたか。」

「うーん。ちょろっとややこしい事に……どうしたの？アンタ…。」

見れば生き残った悪魔と対峙し続けていたようだ。いつもの軽い口調は変わらないが、表情は険しく、良く見れば汗をかいている。

「…この化け物、他の奴等とは格が違うようだぜ？それにいつでも襲えたってぇのに、わざわざこっちの動きに合わしてるみてぇだ。…お前等の会話も聞かれてたかもな。」

「…多少の知恵はあるってことね。…いいわ！嘗められてるってんなら、作戦会議を始めるわよ！」

「よしきたっ！」

「……開き直り過ぎてやしないかの……？」

「良いのよっ！」

内輪揉めを演じてみても相変わらず悪魔に動きはない。…それどころか、小馬鹿にされている気がする。

御坂としては非ッ常～に腹立たしい。が、ここは有効に利用させて貰おう。

「さぁ、円陣でも組むか？」

「…アンタって実は性格悪いんじゃ？……ま、この位おちょくった方が少しは気晴らしになるわね！」

「ん？おちょくる？作戦会議じゃ無いのか？」

「天然かいッ！？」

「……そろそろ真面目にやらんかの？」

「そっ、そうね！…最初に言っとくけど、コイツ英語喋れないから。」

「…そのわりには堂々としておるの？」

本当に円陣を組みながら、会議を始める。

「まぁ、いざって時の物怖じの無さはコイツの強さの１つよ？この状況下ならコイツに任せてくれても問題無いわ。」

「随分と頼りにしとるようじゃの。親しい間柄か？」

「ま、まぁ、まあね。それなりに、し、した、親しい間柄よっ！で、でもまだ、ス、ステディとかじゃ…」

「どうした、御坂？顔が紅いぞ？」

「うりゅさいわね！…すました顔で見てんじゃないわよっ！」

「うりゅさい。って、お前…。いて、わかった。わかったから！上条さんが悪かったから、殴んなって！？」

「ははは。ようやくお主等にも慣れてきたわい。では、切り札はその少年という事じゃな？」

「ハァハァ…そりゃ、どうも！ワタシも電撃の能力があるけど、こと異能に関してはコイツの方が上よ。信じて貰って大丈夫！」

「フム。先程の攻撃も掻き消しておったしな。ではコチラの切り札じゃな？

先程も言うたが、封魔の魔法と言うものがある。…これについては気付かれたらお仕舞いじゃ…。不意をついて発動するしかない。…文字どおり一か八か…じゃ…。」

「…リスクがでかいわね…。ワタシ達が駄目だった時の、ホントの切り札ね。…よし、あとはアイツに説明してから、仕掛けるわ！切り札の合図はアイツがこの樹まで後退したらよ？ＯＫ？」

「ウム。……スマンの。結局はお主等頼みじゃ…。」

気にしないで、と微笑み、英語の方の作戦会議を終える。

「お待たせー。って、何やってんのよ？アンタは…。」

てっきりコチラの話し合いを待ち続けているかと思えば、男の子とミット打ちの真似事をしていた。

「オウ、ご苦労ーさん！いや、な。こいつが悪魔に睨まれてびびってたから、ちょっと。な？」

「Ｙａｈ、トーマ！！」

「あら、カワイイ！…じゃなくて、もう少しマシなもん教えなさいよ？」

「んー？やっぱ身体の動かし方覚えるのが先決と思ってな。ほれ、白井だってあんなにちっこくても、体術とかでカバーしてただろ。」

「ジャッジメントですのー」だったか？」

「ｎｈー？Ｊｕｄｇｍｅｎｔ　？　Ｄｅａｔｈｋｎｏｗ　？

……！！デスノー！デスノー！」

「ヤメテーっ！？キミはそんなのに染まっちゃダメーッ！」

「！？お姉さんは英語が話せるんだね！？トーマは凄いんだよ！！

ボクに何かしようとした悪魔を一睨みで後退させちゃったんだ！」

「あら、それは良かったわね～？やるじゃない、アイツ！

おねーさんは御坂美琴って言うのよ？宜しくね。」

「ミー…サカミ…コト？」

「うーん。日本人のフルネームは言いづらいらしいからねー？美琴で良いわよ？ミ・コ・ト。」

「ミコト！？ボクはネギ＝スプリングフィールド。よろしくね！」

「ミサカミコト様。私はネカネ。ネカネ＝スプリングフィールドと申します。先程は危ない所を助けて頂いてありがとうございます。それと、ごめんなさい。この子がはしゃいでしまって…。あの男性

に励まされたのが余程嬉しかったみたいです。」

「えへへー！」

「ネギ君とネカネさんね？様なんてやめて？ミコトで良いわよ。それに少しくらいはしゃいでても平気よ。あの化け物だってすぐ片付けちゃうから？

……それと、ネカネさん？アナタにも優しくしてたのかしら？」

「私のこともネカネと。ええ、とっても！何だか懐かしい様な笑顔でしたわ。…ミコト？」

「ネカネ！アイツの事、気になって…ないわよね？」

「え？……ええ！」

美（@_@）ジトー

ネ（・_・；）タラタラ

「ア・ン・タはーっ！！」

「うぉお！何だ、どうした！？何かわからんけど、上条さんが悪かった！だから落ち着いてくれー！」

（このまま仕掛けるわよ！ヤバいと思ったら、あの樹まで下がって。お爺さんが切り札を仕掛けるわ！）ボソッ

（へ！…演技か？焦ったァ！…よし、んーじゃいっちょおっ始めるか！）ボソッ

（先手はワタシから行くわ。距離が開きすぎ無いよう注意してね？……後、終わってからハナシがあるから？）ニッコリ

「演技じゃなかったーっ！？」

「当たり前だ！こんの女たらしがーっ！！」

逆上した御坂の雷撃が上条を襲う！…と、見せかけて悪魔へと迫る。

「ふーん。…やっぱ避けたか？臨戦には入ってたって事ね。」

完全に不意討ちを狙ったつもりだが、コチラの動きは把握していたようだ。

最もその不意討ちに一番反応していたのは上条であったが。

「なら、コイツでどう！？」

地面に掌を置き、瞬時に砂鉄槍を作り出し、真正面へと繰り出す。

先に遭遇した悪魔共とは違い、磁力操作による高速振動付きの本気モードだ。

わざわざコチラの動きに合わせたり、先程の雷撃もすんでの所でかわしたりと、どうやらこの悪魔は［観る］事に執着しているようだ。

ならば…。

［！！？］

そんな暇すら与えなければ良い。砂鉄槍は悪魔の直前で左右に分かれる。

「ハァッ！」

そして、獲物を取り囲む様に環状となる。そのまま輪が閉じて行くが…、しゃがみ込む事で回避されてしまう。
悪魔は次の攻撃に備え、態勢を立て直そうとする。その一瞬御坂と視線が絡む。そして、その時悪魔は理解した。
まだこの人間の攻撃は終わっていないと！

「シッ！！」

半径２０ｃｍまでに狭まった砂鉄の輪の下方から、無数の突起が悪魔を襲う。
［ッ！！］

だがしかし、この攻撃すらも悪魔は凌いで見せた。回避不可能と思われた猛攻だったが、砂鉄の輪の中心から上空に逃げてみせたのだ。
どうだ！と、言わんばかりに御坂を見下す。そして自分の自慢と自負する［観る］事を通して一連の攻撃の意図を思い知ってしまった！

（先制攻撃としては悪くなかった。…が、私の方が上手だったな！？狭めるのを途中で止め、攻撃に転じたのも良い！さぁ、次はどんな可能性を見せてくれるのだ？あの意味不明な攻撃をしてくる雄と組んで来るか？……何故笑っている？…いや、いつの間にこの雌は立ち上がった？…いつの間に右手を挙げているのだ？…待て、狭めるのを止めた？…あの無数の突起は何処にむかっていた？…真下だ！ならば…唯一の逃げ道であったのは？…ワナ…）

「いっけえぇぇぇぇっ！」

そう、全てはこの一撃の為。

［観る］事に専念させ、動きを誘導する。
学園都市での戦闘経験は御坂美琴を確実に戦士へと導いていた。
逃げ場を無くした悪魔へと、必殺の雷撃を放つため、右手を振り降ろす！

（あれ？）

（ムッ！？）

バリッ！ドォン！！

御坂は自分の雷撃に違和感を覚えながらも攻撃を続行する。スタン翁も違和感に気付き、御坂の攻撃を見て確信する。

（ディオス・テュコス！！）

そう、雷撃であることに違いはないが問題は形状である。スタン翁の確信通り、それは古代魔法の［雷の斧］に酷似していた！

［グガァァァッ！！！］

何故御坂がこの世界の［魔法］を使えたか？…究明は後にするとし、御坂の攻撃を喰らった悪魔に上条が肉迫する。

「トドメだっ！」

悪魔＝ウ゛ィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンは大いに焦っていた。下らない役目であり、適当に済ますつもりが人間の雌一匹に翻弄され、自らの石化能力を防いだ雄にトドメを刺されようとし

ている。還される訳ではなく、トドメだ。この雄には我々の様な存在を無に帰す力を感じる。…冗談ではない！契約を無効にされるならばプライドの問題だが、存在を無にされては…。
必死の悪あがきだが、そんな思いがこの悪魔の長きに渡る経験の中でもベストショットを繰り出す。

［デーモニッシュアシュラーク！！］

「なっ！？くそっ！！」

御坂の一撃は上条から見ても完璧であった。まさかの反撃に上条の反応が遅れる。そしてその一瞬が命運をわけた。
片や絶命の危機から繰り出された悪魔の拳。
片や油断は無かったとはいえ、怯んでしまった人間の拳。
たとえ五分の条件でも、まず人間の勝ち目は無い。

（先手を逃したっ！まともにやってもこっちが吹っ飛ばされる！）

そう、人間が勝つ可能性は悪魔よりも先に必殺の攻撃を与えるしかない。
異能の天敵とも言える［幻想殺し］ではあるが、基本的には能力のみを相殺出来るだけである。

（だったら！！）

［グゥ！？］

「らあぁぁっ！！」

上条がとった行動は極めてシンプル。避ける事は出来ず、ぶつかり

合ってもコチラの負け。
ならば、軌道を逸らせば良い。
右ストレートを強引にフックさせ、握った拳を掌に変え、悪魔の手首を狙いすまし、いなす！
文字にして3文字。だが、言うは易し、行うは…。
そんな神がかった防御をこなした上条は、流れる様に攻撃に移る。
［ムッ！？］
いなした勢いのまま、体ごと反転させ、旋回式バックエルボー…いわば裏肘をこめかみにヒットさせる。
ほぼ偶然の結果であり、上条の攻撃力自体も強いわけではない。
だが、見事窮地を脱して見せた。
「っぶねぇ！舐めてた訳じゃねぇけど、あっこから反撃してくるとはな…。」
「よく凌いでくれたわ！？…違和感があったとはいえ、出力ミスしちゃったの…。ゴメンね。…ワタシのせいで…。」
「ミス！？…あれでかよ？まぁ、気にするほどのこっちゃねえ。もっと行くぜ！」
「…アンタ。了解よ！押しまくるわ！！…でもアンタ、あの悪魔に触れたわよね？さっきまでの奴等は一瞬で消えちゃったのに…。」
「あぁ、それか？…んー何て言えば良いか。…彼奴等の周りに膜みたいな抵抗があるんだよなぁ…。最初にやったヤツの攻撃を逸らし

た時もそんな感じだったんだ。んで、思いっきりぶちかましたらソレ突き抜けていつもの手応えだったんだよ。」

「アイツラの周囲にバリアがあるってこと？」

「そうそう、そんな感じだ！だからそのバリアを破らねぇと届かねえんだよ。で、アイツの場合ソレが何枚もあるってトコだ。」

助かったと思っていたのはヘルマンも同様。［観る］事だけでなく、上条の攻撃が自分が感じたものであると確信し、攻め手に倦ねいていた。それでなくとも、御坂の一撃がかなり堪えている。

（こんな人間がハイ・エンシェントだと？しかもあの雄、我が障壁をああも易々と貫くか！？
こうなっては……）

「よぉ。オレも交ぜてくれよ？」

別れ

「……。」

一人の青年が廃墟を歩く。ウェールズの辺境にあるこの村はケルトの伝統は色薄く、大自然そのままの風光ある穏やかな場所だった。だが今は、炎が燃え盛りここの住民の大半が物言わぬ石像と化している。

見れば悪魔の残党らしき数匹がコチラの様子を伺っている。

今や雑魚になど興味はない。襲ってくれば倒すだけだ。ナギの胸中は自分達の息子と心穏やかな姪、そしてまだ石化が確認されていない昔馴染みを捜すので一杯であった。

「？」

この村で一番の樹齢を持つ樹がある丘で魔力が感知された。そして、探していた反応があった事にその足が動く。するとそこに雷が迸っていた。

「スタンのじい様か？…いや、あの雷から魔力が感じられねぇ…。」

ニッ「あの二人組かもな？どうやらホントに助けてくれたらしい。…んじゃ、オレも急ぐか。」

距離にして数ｋｍ。一分もかかるまい。

「って事だ！機嫌が良いから相手してやる。…なーに、テメェラが還る駄賃だ。遠慮なんかすんなよ？」ニヤッ

悪魔共にとっては災難だっただろう。既に粗方の役目は終わり、後は子爵の号令を待つばかりであったのに、対価以外のモノまで持ち帰らなければならないのだから。

数分後、言葉通りに魔界までの強制片道切符を恐怖という土産付で与えたナギは、丘へと足を向ける。

「おっ！？…［ディオステュコス］とはな。まだまだだがやるじゃねぇか？」

残り3分の1と言う距離で、自らも馴染み深い古代魔法の発動をみる。

やはりあの二人組。捜索対象の3人も無事である。

（んじゃ、ちょっくら遊ぶか。）

…何やら悪い癖が出そうである。

「よぉ。俺も交ぜてくれよ？」

「「あっ！？」」

［！？］

「「ナギ（さん）ッ！！？」」

「よっ！じい様……ホントに老けたな。
久しぶりだなぁ、ネカネ。まだオレの事憶えてたか？
名前はしらねぇが、おふたりさん。オレの身内が世話になったな。
あんな約束を覚えてくれてて感謝すんぜ？
…そんで……。」

「お……父…さん？」

「よお。
お前がネギか？」

「…お父さん…なの……ホント……に？」

「あぁ…。」

「！？お父さん！！」

スタンもネカネも言いたい事は山ほどあった。だが今は、死亡したと思われていた、ネギが幼い身を犠牲にしてまで会いたがっていた父親との初めての会合を優しく見守っていた。それは内情を知らない上条と御坂も同様であった。

ネギは疲れを振り払い、その幼い体を必死に、懸命に動かし父親の元へ走り寄る。その瞳には知らずの内に涙が流れていた。

走り寄る息子の姿を不動のまま見つめていたナギがしゃがみ込み手を拡げ、ネギを迎える。
その姿にネギの足が一層速さを増す。

「お父さーん！！」

タッタッ！

…。

タッタッタッ！

プルプル…。

タッタッタッタッ！

〜〜〜〜〜！

タッタッピョーン！

ズビシッ！！

「「「「デコピーーーンッ！！？」」」」

「？…？？」

涙目で己が額を押さえ付けるが、状況が全く判断出来ない。

「オイオイ、お前のカーチャンなら問答無用で拳が返って来たぞ？」

「「「なっ、何やってんだ！アンタ（お前）はーっ！！？」」」

「ハハハ。どーにも気まずくてなー。やっぱガラじゃねーんだよ？悪かった。悪かったって、いい加減泣き止めよ、なっ？」

「ウゥゥ？」

「悪ぃな…。もっとしてやりたい事はあったんだけどよ…。
おっ！？泣き止んだな？よし、偉いぞ。褒美に良いもん見せてやるぞ！」

「グスッ。…イイモノ？」
「アァ、トビッキリだ！よーく見とけよ？」
ガシッ！ナデナデ

「ワッ！？…ウン！」

不器用ながらも父親をしているナギは、ヘルマンに狙いをつける。

「んー、そうだなー？
！！オイ、おふたりさん？」

「エッ！？」

「ワタシ…達……？」

「アァ、息子に良いとこ見せてーんだ。手伝ってくれねぇか？」
シンプルでストレートな物言いに御坂は相好を崩す。それは通訳された上条も同様であった。

「コイツもＯＫですって。それで何をすれば良いのかしら？」

「お、そっかアリガトよ！まぁ、アイツにコンビネーションも見せてやりたくてな？
さっきは変わってたが良いもん見してもらったぜ？簡単に言やあ、

そこにオレが入る！」

「ハア…？」

「ま、やれば判るさ。兄ちゃんの方が前衛、嬢ちゃんがミドルレンジってトコだろ？まずオレが行くから、合わせてかき混ぜてくれ。」

「…それだけ？」

「充分だろ？なっ？」

「へっ！？…ああ、んと、……Ｙａｈ！？」

「ハハ、良い返事だぜ。」

「ハァ…。コイツとは馬が合いそうね。ＯＫ・ＯＫぇ。やったろーじゃない！

行くわよっ！！」

「「オゥ！」」

さて、ぶっつけ本番は如何に？

「［サギタ・マギカ］」ドォン！

「やあぁぁっ！」バリッババババ

［グヌゥ！！］

思わぬ増援に逃げる事を優先した矢先、ナギの眼力により蛇に睨ま

れた蛙の様に動けなくなってしまった。その間で何やら話し合いがあり、先程の二名と組んでかかってくる事になった。こうなれば、せめて一矢を報いたいが、先手は取られてしまった。
何より今の攻撃。ただの魔法の矢のくせに、中級魔法以上の威力がある。何とか反撃せねば、このまま受けて続けているだけで致命傷になってしまう。

（電撃の方は撹乱か！？この煙に紛れて近付くつもりだな？…ならば……
！？何だこれは！感覚がねじ曲げられてる様だ！）

「［キーリプル・アストラペー］」
ズドオォォォォン！

［ヌオォォォッ！？］

（何処からだ！何処からの攻撃だっ！？
クッ！視界のみに頼るしかないか！？）

ドババババリッ！

ユラッ

（雷は囮！！こっちだっ！）

［デーモニッシェアシュラーク］

「［メア・ウィルガ］
ハハ、お疲れさん！」

［ッ！！！］

（いつの間に懐に！？
イカン、コイツの攻撃は！！）

「ホントに上手く行ったぜ。御坂様々ってなぁ！」

ちなみに残りの悪魔共は起き上がろうとした時に撹乱ついでにナギの［千の雷］で倒されていた。
断末魔さえ出せずに電撃を喰らいまくった悪魔共に合掌…。

さて、御坂の電磁波を利用した戦法で見事意表をついた上条の右手、［幻想殺し］がヘルマンへと迫らず…、

「飛んでけーっ！」

ドロップキックが決まった！！

やられたヘルマンは土煙の外へと追い出され、

「ハッ！決めちまっても良かったのによ？ホントお人好しだな…。」

上条を見れば親指を立てており、御坂を見れば頷いている。息子の方を見ると、期待に満ち溢れた顔で両手を握りしめている。
苦笑いを一つ見せ、

「ヨッシ！よ～く見とけよ！！」

「ウンッ！！」

トビッキリを開始する。
その時ヘルマンが確認出来たのは、高速で迫る拳のみであった。
ドガッ！
まずは瞬動で距離を詰め、魔力を乗せたスマッシュ。
ヒュッ！
ゴゥッ！ドン！！
［グボォッ！］
次にターンして縦回転の半月蹴り。ヘルマンはここで意識を失う。
瞬時に四身になり、６０にも及ぶ［雷の投擲］にて、浮き上がった体を上空へ飛ばす。
自身も上空へ跳び、無詠唱の［魔法の射手］にて、地上に叩き落とす。
「［ケノテートス・アストラプサトーデ・テメトー］」
トドメは勿論、
「［ディオス・テュコス！！！］」
ドガァァ！！
ズオォォン！！
［雷の斧］による上下のコンビネーションが電撃の顎となってヘル

マンを噛み砕く！

「…ま、こんなもんか？」
開いた口が塞がらない。
ナギ以外の状態を表すのにこれ程適したものはない。上条、ネギ、
ネカネはあまりの激しい攻めに言葉が出ず、
御坂はそれに加え、体術・電撃の熟練度に目を剥き、
スタンは力任せの攻撃しか出来なかったナギの成熟に刮目していた。

「…ォイ！じい様。じい様ってば！！」

「む？うむ？……オォ！！」

「頼むぜ。折角手加減してやったんだからよぉ？」

「ここまでやったのなら、お主がやれば良かろうに…。」

「……ハハハ……。」

「いい加減攻撃魔法以外にも興味を持たんか！
［ヘキサグラマ・エト
ペンタグラマ
マロース・スピリトゥスシギレント
ラゲーナ・シグナートーリア］」

文豪はかく綴る。
この世の終わりは大地獄図絵のような形では訪れない。
画家にとっての訃報は少年と共に電報で訪れた。
…御坂の場合は黒き渦という形で訪れた…。

「ミコトッ！！」

誰よりも早く気付いたのはネカネであった。彼女は悪魔が封印された瓶になど興味はなく、ナギには色々と聞きたい事や聞いてほしいことはあったが、今はネギを思いっきり甘えさせてあげたかった。ならば自分のやるべき事は恩人二人に再度の感謝とせめてもの持て成しに誘うべく注目していたからである。

周りの反応に比べ、御坂自身は至って平然としていた。最初こそ抵抗を考えたものの、直ぐに危険のあるものではないと気付いた。奇縁により、友と呼んでくれた大天使のチカラを感じたからである。背後より迫る漆黒には抱擁されているような心地よささえ感じ取れた。

「御坂ーっ！」

…さて…、上条当麻が犯した過ちは数多に及ぶ。先程までの戦闘の流れで渦を敵対者の攻撃と勘違いしたもの。御坂の反応を確認するのを怠った事。自分が異世界にいるのを忘却している点。他にも列挙出来るが、最大の過ちは、

バキィィィン！！

漆黒に包まれた御坂へ右手を伸ばしたことだった。

「あ……。」

自ら起こした現実にようやく気付くが、時既に遅し。
この時代において上条当麻はたった一人の異邦人と成り果てた。
そして同時に、慣れ親しんだ街や友よりも自分を追ってくれた少女

を自分よりも不安定な状況に叩き落としたのだ！！

「…ぅ…ぁ…うあああぁっ。」ドガッ！ガッ！ガッ！

……端から見れば何とも間の抜けた話である。蜘蛛の糸を昇る罪人の様に。

だが…、当の上条にとっては…、

「グッ。…く……あがぁああ！」ゴッ！ゴッ！ゴッ！

おそらく記憶を失ってから初めてであろう。

時には感謝さえ感じたこの右手を…切り落としたくて…自分から切り離したくて…仕方がなかった。そして、体はその願いを正直に表していた。

「くそ…くそっ！…チクショウ！」ミチッ！ゴリッ！

ネカネは止めなくてはならないと思いながらもネギの目を塞ぐのに文字通り手一杯だった。…いや、本当の所は恐いのだ。年齢よりも聡明な彼女は気付いた。彼の姿は何の助けも届かなかった場合の自分の姿であることに。

スタンはネカネの考えに気付いてはいたが、今は彼の好きにさせるようにした。翁の苦渋は深い溜め息が証明していた…。

途中で目を塞がれたネギであったが、人体が壊れていく音は聞こえていた。想像出来る惨状に顔を蒼くしたままだが、両の拳は握りしめていた。自分を救ってくれた人物に声さえかけられない事を不甲斐なく憤どっていたのだ。

ナギはそんな息子を万感の想いで見詰め、上条へ目を細めながら黙っていた。もしかすると、ナギには共感出来たのかもしれない

そんな周囲の反応を他所に、自虐はエスカレートしていった。

「くそっ…ちくしょう……オレはなんて……御坂…すまねぇ…。」

「御坂ぁーーっ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1952w/

英雄達と魔法使い達

2011年11月5日12時04分発行